

大槌町役場職員

大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書

岩手県 大槌町

大槌町
役場
職員

大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書

大槌町役場職員

大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書

大槌町役場職員

平成23(2011)年3月11日、経験したことのない大地震に遭遇した役場職員たちは、それぞれの持ち場で、自らの職責を果たそうと懸命に行動していました。本書は、あの日の職員たちのありのままの姿を書き記し、後世に教訓と反省を伝えるものです。

津波で命を落とした職員も、その死を悼みつつ今を生きる職員も、同じ志で地域に仕える「大槌町役場職員」。書名にそんな思いを込めました。

大槌町 役場 職員

大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書

刊行に当たって

一層の融和と相互理解を

大槌町長 平野公三

この『大槌町役場職員』は、東日本大震災から10年が過ぎた令和3(2021)年、津波の犠牲になられた役場職員の足取りを追った「大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書」を、ご遺族の了承を得て、多くの方が手に取りやすいように、書籍にしたものです。このたびの刊行は、私たちがいざ大災害に見舞われたとき、日本中のどの市町村であっても、大槌のような悲劇が二度と起こらないようお願い、記録と教訓を後世に伝えることが大きな目的です。

10年という年月を経て、ようやくあの日の出来事にまっすぐ向き合い、亡くなられた方々の在りし日をしるぶ書物を世に送り出すことができました。私は今ここに、震災当時の防災行政の実務担当者として、甚大な被害を防げなかったことの責任を痛感し、犠牲となった職員並びに町民の皆様、そのご遺族に深くお詫び申し上げます。

今回の調査は、肉親の最期の様子をできる限り知りたいたいというご遺族の切なるご要望があつて実現しました。これまで私も町役場は目の前の復旧・復興事業に傾注するあまり、使用者として責任を負っているにも関わらず、亡くなられた職員の状況に関する説明が尽くせていませんでした。そんな私どもを慮り、ずっと声を上げることためらっておられたご遺族の苦しい胸の内は、察するに余りあります。対応の不十分さから精神的なご負担をお掛けしてしまったことにつ

いて、改めてお許しを乞いたいと存じます。

そして、怒涛のような震災対応の中、残された職員や全国各地から町のために来てくださった応援職員の皆さんに対する心のケアが足りなかったことを猛省しています。複数の方が自ら命を絶たれてしまったことはいくら悔やんでも悔み切れません。心身ともに疲れ果て、職場を去らざるを得なかった方々にも申し訳ない気持ちでいっぱいです。今なお、不調に悩む職員がいて、関係機関のご支援・ご協力を得ながら継続的な心のケアを必要としている状況にあります。

震災から10年、現職員の半数はその後に採用された人たちです。職員として災害時に自らと家族の命を守ることが、ひいては町民の健康・生命・財産を守ることにつながるとの信念の下、職員の防災学習・防災訓練を通して、町の震災伝承のテーマ「忘れない」「伝える」「備える」を徹底的に実践していききたい所存です。

また、旧役場庁舎跡地は、津波によって災害対策の拠点となるべき役場の機能と職員の尊い命を失い、町の復旧復興に困難をきたすことになった象徴的な場所でもあります。今後、震災の出来事や教訓を町内外に伝えるために、津波の高さや恐ろしさをイメージでき、視覚的に伝えられるものを設けるなど、震災伝承の場として積極的に活用してまいります。

これまで、悲しい出来事の現場となった旧役場庁舎の解体を巡って意見が対立したり、当方の配慮の足りなさから職員ご遺族の心情を傷つけたりしてしまったことは誠に遺憾でした。これから、この書籍が一つのきっかけとなり、この町で「融和」と「相互理解」がより一層深まることを願ってやみません。

加藤国雄さん	金崎健悦さん	佐々賢一さん	佐々木庸介さん	上野芳子さん	祝田眞悟さん	鈴木有香里さん	木村圭治さん	花石一さん	齊藤充さん	佐藤一葉さん	小笠原広樹さん	藤原宏一郎さん	澤館純一さん	加藤宏暉さん
94	93	92	92	91	90	90	89	88	87	87	86	85	84	84
中村仁人さん	前川美知さん	三浦英人さん	小川千里さん	兼澤圭作さん	佐野雅樹さん	六串俊範さん	佐々木良一さん	菊池則子さん	岩間成子さん	小笠原裕香さん	阿部久美子さん	倉堀健さん	関郁夫さん	里館ひろ子さん
105	104	103	102	102	102	101	100	99	99	98	97	96	95	94
								前川正志さん	押野千恵さん	小國奈穂子さん	佐藤拓也さん	川端大佑さん	三浦徳幸さん	岩間久さん
								109	108	107	107	106	106	105



大槌町

岩手県の沿岸南部に位置し、総面積は 200.42 平方キロメートル、人口は1万1269人(2021年5月末日現在)。町域の大部分が山岳地帯で、太平洋に注ぐ大槌川、小槌川流域の平地に市街地を形成。サケ、スルメイカ漁などの沿岸漁業、帆立て貝やカキなどの養殖漁業が盛ん。明治29(1896)年と昭和8(1933)年の三陸大津波、昭和35(1960)年のチリ地震津波で甚大な被害を受け、平成23(2011)年の東日本大震災津波では県内で最も高率の、人口の8%に当たる1286人が亡くなった。町役場周辺の津波の高さは10メートル程度だとされる。

はじめに

大槌町は東日本大震災の大津波で人口の1割に近い1286人が尊い命を落としました。町役場は当時の正職員と臨時職員、第三セクター職員の2割に当たる40人が犠牲になり、町長を含む約30人の職員が役場庁舎の内外で災害対応の任務に従事するさなか、津波にのまれました。

震災後、町は甚大な被害を出した反省から、平成25(2013)年度と28(2016)年度の2度において震災対応の検証報告書を公表しました。しかし、これらの報告は災害対策本部や被災後の対応に関する防災行政の観点からの検証が主で、ご遺族の中から肉親が具体的にどんな状況で亡くなったのか分からないなどという声が上がりました。平成31(2019)年2月には、ご遺族2組から町に対し、死亡状況の調査に関する強い要望がありました。

町は令和元(2019)年7月、震災記録誌『生きる証^{あかし}』を発行し、多くの職員が亡くなった旧役場庁舎周辺の状況について詳述する記事を掲載しました。しかし、同記事はあくまでも事実関係の推移に焦点を当てること为目的であり、数人の犠牲職員の動向はある程度判明したものの、一人一人の最期を究明する内容でなかったため、ご遺族の期待に添え切れませんでした。

現職の町長平野公三は記録誌発行と前後して20組以上の職員遺族を訪ね、ご遺族に対する説明や職員の命を守る取り組みが不十分であったことを謝罪しました。この中で、多くのご遺族が肉親の最期の姿を知りたがっていたとして、同年9月、「第三者」の聞き取りによる死亡状況調査を実施する意向を表明しました。

公務中に震災に遭って亡くなった職員の皆さんについては、当時、町の雇用管理下にあったことから、

町はご遺族に対し、使用者として死亡の原因や状況に関して可能な限り説明する義務があります。同調査はこうした説明責任を果たすとともに、近い将来、起こり得る大災害で町民の命を守るべき職員に二度と同じような人的被害を出さないため、記録と教訓を後世に伝えることが目的です。

調査では、肉親の最期を知りたいご遺族にとって納得性の高い成果を目指しながら、全国の各自治体のみならず、教育機関や民間組織が防災対策に役立てられるよう、公益性を重視しました。報告書の公表はその一環です。「人命を守ることが最大の公益である」との信念の下、個々人の死亡状況を究明することがあの惨事の全体像と要因を浮き彫りにし、ひいては国民全体の利益につながることを願うものです。

調査が緒に就いた令和2(2020)年2月以降、ご遺族からのご意見・ご要望の聴取と並行しながら、震災当時の職員をはじめ、関係業者や一般町民の皆さん50人以上に対して、津波当日の犠牲職員の動向について聞き取りを行いました。あの日、職員の皆さんはどのように行動し、逝ゆいたのか。調査ではその背景も探りました。犠牲職員40人のうち、ご遺族の了承が得られた38人の足取りを掲載しました。

この調査報告書に記された内容は、震災から9〜10年を経た皆さんの記憶、証言に基づいています。その中には当然、記憶の風化や変容、錯誤があるものと思われませんが、可能な限り多くの証言を突き合わせ、様々な情報を吟味、取捨選択しながら慎重に事実認定を試みました。ほぼ10年後の記憶の「断片」を層のように積み重ねて、構成された記録であることを念頭に置き、お読みくださると幸いです。

凡例

- ・ 役場職員や証言者の肩書は当時。
- ・ 初出で「故」の表記がある職員は津波の犠牲者です。
- ・ 氏名の表記は、原則として各章・節で初出の際や、同姓の人物が頻出して紛らわしい場合などに適宜フルネームを載せています。
- ・ 要望により匿名とした証言者がいます。

震災前の 町中心部



2011年6月、煙山佳成さん撮影
※写真中のデータは撮影当時、方位は目安

第1章 あの日、何があったか

主に地震発生の前後から大津波が役場庁舎を襲うまでの職員の動きを、
時系列に沿って克明に再現しました。

1 地震発生まで

議会散会で平穏な日常

平成23(2011)年3月11日、新町の大槌町役場(※庁舎の配置や町内の地理は56ページ、57ページ参照)。この日は朝からどんよりとした曇りがちの天候で肌寒く、隣接する釜石市の気温は正午を過ぎても7度に届いていませんでした。町役場では折から新年度予算審議の町議会定例会が開かれており、金曜日の11日は午前中に予算特別委員会を構成して散会したところでした。

散会后、通称「裏庁舎」1階の福祉課に、1月に福祉課長から総務課長に異動したばかりの故澤舘純一さん(当時56)が姿を見せます。「おう」。ワイシャツの袖をまくり上げたまま、幼なじみの中野久実子・福祉班主任査に声を掛けると、福祉課長の故関郁夫さん(当時58)の席へ。2人は週明けの議会再開を控えて、ざっくばらんに意見交換をしていたようです。上司の決裁を取りに大ケ口の水道事業所から役場に來ていた山田美誉輝・上席主査水道班長も、釜石南高校(現金



震災前の役場庁舎。中央棟は震災当時で築57年が経過していた

石高校)の同級生だった関さんと偶然出会い、関さんが1月の人事異動で派遣先の釜石大槌地区行政事務組合(釜石市)から帰任してきたことから、「久しぶりだな」などと会話。役場には普段と変わらない穏やかな空気が流れていました。

昼休み、総務課総務広聴班主事の故佐藤一葉さん

当時(26)はいつものように、末広町の自宅で家族と食卓を囲んでいました。話題は翌日に予定していた久慈市への家族旅行。「午後には有休取って前泊で行こうか」。母道代さんにそんな提案をしながら、一葉さんは家を出ます。税務会計課長の故祝田眞悟さん(当時(60))も昼食で寺野地区の自宅に帰っていました。妻秀子さんが「3月いっぱいまで定年なんだし、午後は休みにしたら」と持ち掛けますが、祝田さんは「いや、そうもいかないんだ」と役場に向かいました。

午後1時ごろ、町畜産振興公社の職員、故兼澤圭作さん(当時(57))は桜木町の自宅で昼食を取った後、妻萬里子さんに車で送ってもらい、小鎚・三枚堂地区の車両置き場にいました。そこから除雪用のトラクターを運転して、西北に約10⁵離れた新山牧場に配備するためです。「じゃ、行ってくつかけ」。萬里子さんは車に向かって歩く夫の後ろ姿を見送りました。

2 地震発生(15時)

一斉に飛び出す職員たち

午後2時46分、町役場を三陸沖が震源の激しい揺れが襲います。釜石市中妻町では、そのまま立っていることが難しいくらいの震度6弱を観測しました。東棟2階南端の町長室では町長の故加藤宏暉さん(当時(69))と東梅政昭副町長がソファに座り、総務課長の澤舘純一さんが人事案件の打ち合わせに来るのを待っていました。加藤さんはとっさに、ガラス張りの大きなサイドボードが倒れそうになるのを手で押さえました。

「外だ。外に出ろ!」。町長室に隣接する総務課で、課長の澤舘さんが号令し、現町長の平野公三・主幹兼総務広聴班長ら課員と階段を下りていきます。1階の給湯室で地震に遭い、庁舎東側の公道に飛び出した三浦義章・同班主事が総務課に上がると、同班の先輩主事で広報誌担当の故小笠原広樹さん(当時(28))が自席のそばにいました。小笠原さんは「貴重品とかカメ



写真①

ラを持って」と三浦主事に指示し、庁舎前に行きます。後を追って外に出た同主事は、パソコンや観葉植物などが横倒しになった副町長室の様子(写真①)を撮影するよう誰かに命じられ、撮り始めから津波襲来までの30分間、庁舎前の戸外に設営された災害対策本部の状況などを計28枚の写真に収めることとなります。

東棟1階の企画財政課。「室内は危ない」。激しい揺れに課長の故木村圭治さん(当時56)が大声を出しました。同課の壁に掛けられた震度計からは、ひっきりなしに震度を印字したロール紙が吐き出されてきます。木村さんは財務班主事の故鈴木有香里さん(当時28)から課員と共に東棟玄関から庁舎前に出ます。鈴木さんはこの日、体調不良で午前中休んでいましたが、新港町の自宅で昼食後、「仕事があるから」と母みよさんに告げて出勤していました。

佐々木庸介さん「俺たちは残る」

中央棟1階の町民課でも、課長の故佐々賢一さん(当時55)と主幹兼町民生活班長の故金崎健悦さん(当時56)が戸外への避難を呼び掛けます。同課のカウンターでは主任主査国保年金班長の故里館ひろ子さん(当時57)が、応接中だった町民の中年女性にすぐ逃げるように説きました。「こりゃあ、大変だ」。金崎さんは庁舎前で、ワイシャツ姿で飛び出した総務課長の澤舘さんと言葉を交わし、桜木町の自宅にいた妻

正子さんに携帯電話で「早く逃げろ」と伝えます。

本震の直前、中央棟1階の税務会計課では携帯電話の緊急地震速報がけたたましく鳴り響きました。「でかいのが来ます!」。収納班主事の金崎真史さん（当時28）、2012年に逝去（58）が叫んだ数秒後、激しい揺れが襲い、森田英之・課税班主任はとっさに外に飛び出します。アスファルトの地面はまるで「豆腐のように」波打ちました。「建物の中に戻るな!」。庁舎前では総務課長の澤舘さんが声を張り上げていました。

中央棟と東棟に挟まれて立つ役場職員組合のプレハブの2階から、浪板圭子書記が同課のカウンターに駆け込んできます。主幹兼出納班長の故佐々木庸介さん（当時58）が立っていました。「ねえ、どうしたらいいのかな?」。浪板書記はあわてて問います。「早く帰れ、逃げろ。けど、俺たちは残んなきゃねえ」。この後、佐々木さんは庁舎前で、同班主事の女性が用心のために持ち出した手提げ金庫を「総務課の高い所に置いてきてやっから」と受け取って、東棟2階に運んでいきました。

高まる庁舎倒壊の恐れ

総務課・企画財政課が入る東棟と税務会計課・町民課のある中央棟からは、当時執務中だった三十数人の職員が揺れに驚いて庁舎前の広場に出てきます。

鉄筋コンクリート造の中央棟は昭和29（1954）年の竣工で当時築57年、昭和40年代前半に増築された東棟（コンクリートブロック造）は築40年以上を経て、それぞれ著しく老朽化が進んでいました。耐震補強も施されておらず、中央棟1階のモルタル壁は剥がれ落ちている箇所があり、東棟2階の廊下や総務課の床にも複数の亀裂が認められました。加えて、2日前の9日には前震とみられる震度4の揺れが大槌町で観測されており、職員の間では2度の大きな地震で傷んだ庁舎が倒壊するのではないかとの恐れが高まっていました。

大槌町から最も近い観測地点で、南に35キ離れた大船渡市での本震の強震波形を見ると、大きな揺れが2〜3分程度続いています。本震の後、いったんそれぞれの課室に戻った職員もいれば、そのまま庁舎前に残った人もいたようです。総務課長の澤舘さんと平野・

総務広聴班長は東棟2階の同課に上がりました。隣接する大槌消防署から道又義明・消防司令補が来て、「消防署は停電してる。何か情報は入ってねえか」と同級生の澤舘さんに尋ねます。「いや、こっちもまだ詳しいことは分かんねえんだ」

町民課の室内では、戻ってきた課長の佐々さんと町民生活班長の金崎さんが「すげえ揺れだったな」と顔を見合わせ、津波への警戒感をにじませました。「災対本部を立ち上げねえばな」。金崎さんがつぶやきます。

役場に戻った加藤国雄さん

そこに、安渡地区の漁協で漁業関係者向けの衛生管理の講習会に立ち会う予定だった同課町民生活班主任の故加藤国雄さん（38）が公用車で戻ってきました。地震のすぐ後に会場に現れた加藤さんに、先着していた産業振興課の藤枝昭彦・水産商工班主任が「講習会は中止。津波が来るから早く逃げて」と伝えますが、役場に向かってしまったのです。漁協から車で約5分。加藤さんが町民課に姿を見せたのは午後3時前

だと思われれます。加藤さんは少なくとも津波襲来の5分前まで役場に居続け、災対本部の設営作業などに携わります。

町民課国保年金班の金野匠主事が、災害時に担当する大念寺の避難所に向かおうと庁舎前で自転車のペダルをこぎ出すと、同班長の里舘さんが「どこ行くの？」と尋ねます。そばに総務課職員情報班主事の故齊藤充さん（31）もいて、同級生で親友の金野主事は「大丈夫か」と声を掛けます。「おお」。齊藤さんは短く答えました。

里舘さんはこの後、役場東側の駐車場に止めた自家用車の黒いステーションワゴンに乗って海辺の新港町の自宅に向かいます。愛犬のラブラドルレトリバーを避難させるためでした。通常、駐車場南側の県道大槌小槌線を東進して大槌川にかかる大槌大橋を渡りますが、この日に限って、北上して同橋より上流の安渡橋方面に車を走らせます。裏庁舎北側の公道に出ている福祉課の越田由美子・介護班長が発車する様子を見ていました。

里舘さんは津波で大槌大橋のたもとに設置された

陸閘（水門）が閉まることを予期して、安渡橋に回ったと思われます。当時町内でイルカ漁を監視していた米国の反捕鯨団体が、レンタカーと思われる車で避難中に沿道をビデオ撮影していて、自宅前で車に乗り込む里館さんの姿を偶然収めていました。車内のデジタル時計によると、午後2時55分のことでした。



里館ひろ子さんが津波による閉鎖を予期したと思われる大槌大橋の陸閘。実際は閉められなかった

倉堀健さん、消防署に向かう

中央棟の北側に隣接し、平成14（2002）年に完成した木造2階建ての通称「裏庁舎」の状況はどうだったのでしょうか。裏庁舎には1階に福祉課、2階に産業振興課と地域整備課が入っていました。

福祉課の三浦大介・福祉班長は釜石市での用務を終えて公用車で帰庁し、裏庁舎北側玄関の自動ドアをくぐり、廊下を歩いていました。「班長、地震ですー」。臨時職員の故菊池則子さん「当時（51）」が飛び出してきました。「え、地震？」。次の瞬間、三浦班長は大きな横揺れを感じ、よろめきながら福祉課の自席にたどり着きます。

福祉課は当時、約20人の職員が在室していました。午後1時から須賀町分庁舎であった三種混合の予防接種が終わり、戻ってきた健康推進班の保健師らが後処理などに追われているところに揺れが襲いました。課長の関郁夫さんをはじめ、多くの職員が裏庁舎北側の玄関から外に出ます。激しい揺れに、玄関の自動ドアの上からパラパラと白い粉のような物が落ち、隣接す

る民家のブロック塀も崩れました。

関さんは「これはやばいぞ」と言っ、裏庁舎の東側を回って本庁舎（※裏庁舎以外の各棟を指す）方面に駆け出しました。介護班主事の故倉堀健さん（待し） 当時（30）は役場から近い大町に住居があり、災対本部の任務に就く「本部指名職員」で、関さんと同レベルをたどりました。ほぼその足で大槌消防署に行ったとみられ、1階にいた白澤岳・消防副士長に「被害の連絡は入っていませんか」と尋ねています。本震の直後でまだ報告が上がっていないと知ると、すぐに立ち去ったといひます。本震が収まった後、健康推進班の藤原純枝・主査保健師が部屋に戻ると、臨時職員の菊池さんが散乱した書類を片付けていました。

2階東側の産業振興課。小刻みだった揺れがだんだん大きくなつていきます。「2日前の地震の余震かな」。白澤洋喜・農政班主事がそう思ったのもつかの間、1分ほどで揺れは最大に。「テレビ、倒せ!」。関貴紀・同班主査が叫び、棚やデスクから液晶テレビやパソコンのモニターが落ちないように白澤主事と共に横に伏せました。課長の故佐々木良一さん 当時（56）は倒れ掛

かってくるキャビネットを体ごと押さえつけます。当時室内にいた臨時職員2人を含む9人が外に出ました。

「これ、逃げた方がいいんじゃないでしょうか」。前後して白澤主事が声を上げ、八幡まゆみ・水産商工班主任や佐々木直美・臨時職員は高台の城山方面に向かうために所持品を持ち出します。2人が階段を下りていくと、1階の踊り場付近で2階に上がろうとする課長の佐々木良一さんとすれ違いました。「どこさ行く?」「いやあ、避難するんですよ」「そうか、氣い付けてな」。短いやり取りがあつて、八幡主任は裏庁舎を後にします。直後の午後2時50分、同主任は携帯電話で母親に安否確認のメールを送り、約200メートル離れた城山のふもとの江岸寺まで歩いてから周辺で住民の避難誘導に従事。関貴紀主査と白澤主事も避難所や避難誘導の持ち場に就くために、関主査の自家用車に同乗して出発しました。

待機した地域整備課

2階西側の地域整備課には当時、女性の臨時職員2

人を含む13人がいて、そのうち11人が津波の犠牲になりました。上席主査管理班長の故三浦英人さん（55）は、助かった職員2人のうちの1人、小國植也・同班主事と釜石市の県沿岸広域振興局であった会合に出席し、同課に戻った数十分後に地震が起きます。激しい揺れに、書棚のファイル類のほとんどはバラバラと床に落ちました。三浦さんは席の近い臨時職員、故押野千恵さん（26）が怖がるのをなだめます。

管理班主事の故前川美知さん（32）は、隣席でもう1人の生存職員、久保晴紀・同班主事と背後の書棚が倒れないように押さえました。前川さんはこの日、午前中に長女の通う保育園で参観があり、午後から出勤していました。「つながらない、つながらない」。携帯電話で誰かに連絡を取ろうとしますが、不通だったようです。右隣に席があり、就労から日が浅い臨時職員の故小國奈穂子さん（25）には「家、どこだっけ？ 安渡？」と声を掛けるなど、前川さんは特に自分と同性の若い臨時職員2人を気遣っていました。「ひとまず、待機すつぺし。見回りの準備もしてけんねえか」。課長の故小川千里さん（58）は部

下にこう命じて、いったん部屋から出ていきます。同課は災害時、「ライフライン関係課」と位置付けられ、道路や下水道といった公共土木施設の被害調査とその保全・復旧などを担当する決まりになっていました。管理班はそれらの手配や連絡、技師らでつくる工務班は実務を担います。小川さんの指示は、それゆえでした。この時点では前述の職員のほか、管理班主事の故中村仁人さん（24）、主幹兼工務班長の故岩間久さん（57）、同班主査の故三浦徳幸さん（44）、同班主任技師の故八幡力さん（36）、同班技師の故川端大佑さん（30）、同班主事の故佐藤拓也さん（29）がそろっていました。

本庁舎に急ぐ前川正志さん

中央棟の西北側に接して2階建ての西棟があり、2階の議会事務局には主任主査監査班長の故前川正志さん（52）ら職員3人が在室していました。澤館悦子・議事班主任書記は徐々に大きくなる揺れに、避難路を確保するため、外階段につながる扉を開けに行

きます。外階段踊り場の柱にしがみついて揺れが収まるのを待った後、隣接する裏庁舎西面の窓に目をやりますが、ブラインドが下りていて地域整備課のある窓の向こう側はうかがえませんでした。階段を下りた所で産業振興課長の佐々木さんと出会い、「ひどい揺れでしたね」と話し掛けます。裏庁舎の玄関付近には20人ほどの職員が出ていました。

澤館主任書記がすぐに議会事務局に戻ると、コートを着込んだ前川さんと主任主査議事班長が、中央棟北の増築庁舎につながる長い廊下を並んで歩いているところでした。同事務局職員は災对本部の「総務部」に属し、総務課員と共に同本部を統括する任務に就くことになっていました。

祝田眞悟さんは避難誘導

役場から150メートル西にある末広町の集会施設「御社地ふれあいセンター」の2階会議室では、税務会計課課税班主任の故上野芳子さん（当時34）ら同班の職員4人と臨時職員1人が確定申告の受付業務を

していました。長く、激しい横揺れが収まると、田中恭悦・課税班長や管理人の小向幹雄さんが来場者に城山に避難するよう呼び掛けます。この日は3階で中心街町方地区の婦人会のメンバー10人ほどが踊りの練習をしていました。この中には上野さんの母上野ヒデさん（2018年に逝去）もいました。

課税班職員は館内を見回った後に戸外に出ました。芳子さんと一緒にいた同班主任はこの時か、午後3時



上野芳子さんら課税班員が確定申告業務をしていた御社地ふれあいセンター＝2003年8月撮影

ごろに徒歩で新町に住む実母の安否を確認して戻ってきた後、税務会計課長の祝田眞悟さんがセンター前の町道を挟んで北側のアスファルトの広場で来場者や住民の避難誘導に当たって

るのを見ました。「こつちです。こつちに来て下さい」。祝田さんは建物からの落下物などを恐れて、向かいの広場に手招いているようだったといひます。

福祉課主任主査地域包括支援センター班の班長、故阿部久美子さん(当時51)、社会福祉士の故小笠原裕香さん(当時26)、臨時職員の故岩間成子さん(当時44)は、ケアマネジャーの研修会を運営する用務で釜石市大町の釜石市民文化会館に来ていました。開会からほぼ15分後、激しい揺れが会場を襲い、阿部さんらは参加者が避難したのを確かめてから、同行者の運転で役場に向かひます。

防災無線に警戒

午後2時49分、気象庁は岩手県に大津波警報を出すとともに、予想される津波の高さを3mと発表し、各放送局も速報します。裏庁舎の地域整備課で携帯電話のワンセグ放送を見ていた小國楨也・管理班主事は、同班長の三浦英人さんにこのことを伝えました。庁舎内外にいた職員たちも同様に情報を得ていたはずで

同56分過ぎ。「ただ今、岩手県沿岸に大津波警報が発表されておりまひます。海岸部の皆さんは、定められた避難場所へただちに避難してください」。町内23カ所に設置された防災行政無線のスピーカーからサイレンとアナウンスが流れます。大槌消防署の白澤副士長が、停電後に自家発電機の電力で映し出されたテレビ画面



役場庁舎のほぼ東側に隣接し、高台避難を呼び掛ける放送をした大槌消防署=震災前に撮影

に「大津波警報」の字幕が流れて、いるのを見て、放送したのです。庁舎周辺で防災行政無線を聞いた企画財政課の澤館和彦・上席主査財務班長は、指定緊急避難場所の「大ケ口裏山」の誘導担当者が当日不在だったために、

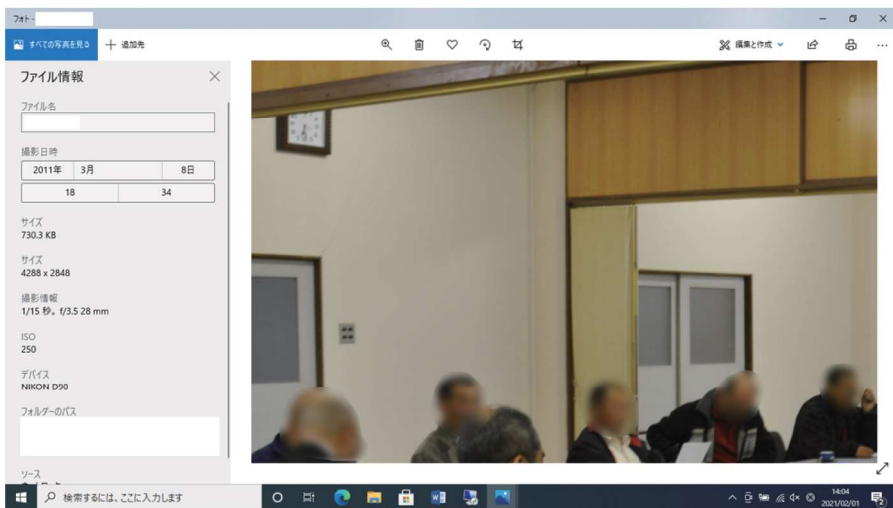
以前の担当者として同所に向かおうとします。廊下にあったロッカーからコートを取り出して、準備のため同課に戻ると、財務班主事の鈴木さんが茶色っぽいジャージーに着替えた状態でした。「家にいる姉さんの子どもたちは大丈夫か」。当時、小学生の甥3人が一時的に鈴木さん宅で生活していることを知っていた澤舘班長が心配して尋ねると、「北小（大槌北小学校）にいるから大丈夫です」と答えました。鈴木さんはこの後、再び庁舎前に出ます。

裏庁舎の玄関付近に部下の保健師たちと出ていた福祉課の上席主査健康推進班長も、防災行政無線の放送に津波への危機感を高めます。すぐ近くでは介護班主事の倉堀さんが同級生と思われる町民の女性を諭していました。「津波が来るから早く逃げろ」。倉堀さんは裏庁舎と本庁舎の間を何度か往復していた可能性がありますが。このころ、福祉班の黒澤直美主任に、臨時職員菊池さんが「家に高齢の母がいます。帰ってもいいですか」と不安げな表情で尋ねます。

進んでいたデジカメの時刻

本震の後、同51分から58分にかけて、福島県沖や茨城県沖が震源の震度3（釜石市で観測）などの余震が4回起きました。本震の時に母親と大町の外科医院にいた議会事務局の赤崎仁一事務局長は、本町の自宅で防災服に着替えてから自転車で役場に向かい、まっすぐ東棟2階の町長室に入ります。そこには町長の加藤さんと東梅副町長がいました。余震が続く中、この2人は一緒に外に出たとみられます。「寒いから上っ張りを着た方がいいな」。加藤さんは階段を下りる途中、東梅副町長にこう話し掛けました。

三浦義章・総務広聴班主事がこの時間帯の庁舎前の様子を連続して5枚の写真に収めています。総務課備品で広報誌の制作業務に使っていたデジタルカメラに記録された時間帯は、内蔵の時計によると3月11日午後3時2分から3分の約2分間。さらに津波が庁舎を直撃した画像を撮った時刻は同3時26分となっています。しかし、これらの時刻は次のような根拠により、約5分進んでいると考えられます。



2011年3月8日撮影の写真（部分）とファイル情報。壁掛け時計が6時29分付近を指している

- ①同カメラの導入以来、正確に時刻合わせをした記憶が三浦主事にないこと。
- ②同カメラで3月8日午後6時34分撮影の記録がある役場会議室内の風景で、壁掛け時計の針が同29分付近を指していること。



植田俊郎さんが3月11日午後3時22分に撮影した大町、須賀町一帯を水没させる津波

- ③当時大町在住の医師植田俊郎さんが津波の前年暮れに購入し、時刻合わせをしたとされるカメラで、役場のあった新町に隣接する大町、須賀町一帯が津波で水没した状況を撮影した時刻が午後3時22分であること。

④小笠原純一・学務課学務班主任が城山に立つ中央公民館で、午後3時21分から2分30秒間、携帯電話のカメラで撮影した町内の映像に、JR大槌駅(当時)の背後から迫る津波が中心街の町方地区に流れ込み、完全に浸水させる様子が収められていること。

⑤城山に避難した産業振興課の佐々木直美・臨時職員が携帯電話のカメラで午後3時21分と22分の2回、それぞれ約15秒間撮影した動画で、前者に安渡方面を襲う津波、後者に町方に押し寄せる津波が映っていること。

⑥津波を撮影した小笠原主任、佐々木臨時職員の常用する携帯電話の時計が遅れたり、進んだりしていた可能性は極めて低いこと。

余震相次ぎ庁舎前に

備品が散乱する副町長室の様子を撮影した三浦主事はカメラを携行したまま、先輩主事の小笠原広樹さんと自家発電機の燃料を探しに東棟1階倉庫に入りま

断続する揺れに2人は燃料調達をいったん諦めます。

三浦主事は階段下の倉庫から目と鼻の先の東棟玄関を出て、推定午後2時57～58分に写真②③④⑤⑥を撮影したようです。写真②や④に納まる職員たちは相次ぐ余震におびえて庁舎前に出てきた姿だと推測できません。停電のため、東棟玄関には照明がついていません。

写真②③④の推定撮影時刻午後2時57分は消防署が最初に防災行政無線を流した時間帯と重なり、職員たちは戸外でこの放送をはっきり聞こうとしていたとも考えられます。当時、庁舎前駐車場の西側の一角に防災行政無線の拡声器を付設した鉄柱が立っていて、写真③右側の東梅副町長は明らかに鉄柱の方角に体を向けています。

写真②の左側には、東棟玄関から出た直後らしい町長の加藤さんの後ろ姿が写り込んでいます。その前方には東梅副町長もいます。また、いずれも後ろ姿で、携帯電話に見入る総務課総務広聴班主任の故藤原宏一郎さん(当時35)、茶色のコートを着た同班主事の佐藤一葉さん、税務会計課長の祝田さん、国保年金班長の里舘さんが見えます。



写真②



写真③



写真④

厚手の上着を着て歩く様子の祝田さんは、確定申告会場の御社地ふれあいセンターに向かおうとしていたのかもしれない。里舘さんは自宅から車で飼犬を連れて戻ってきたばかりだと思われる。東棟玄関前にはすでに、東棟1階倉庫にあったとみられる小型の自家発電機が運び出されています。

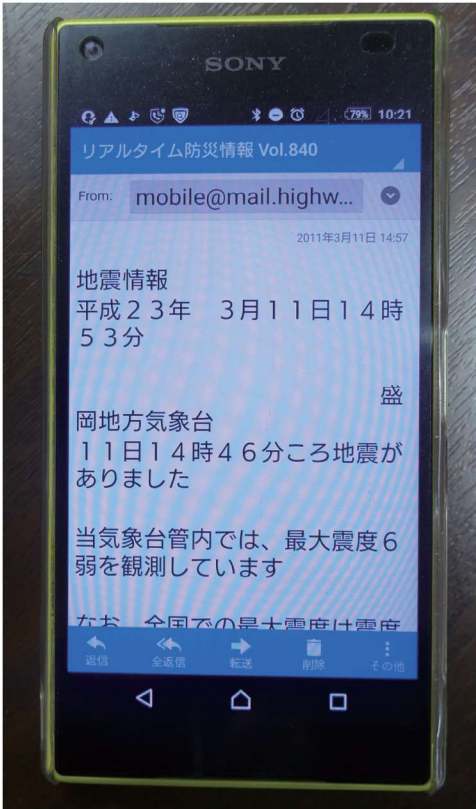
「携帯、忘れてっぞ」。このころ、佐藤さんの7歳違いの弟弘誓^{ひろちか}さんが庁舎前に携帯電話を届けに来ます。昼休みに帰宅した佐藤さんが携帯電話を充電器に差し込んだままだったのに母道代さんが気づき、弘誓さんに持たせたのです。「大きな津波が来そうだから母さんと逃げて」。佐藤さんは短く伝え、弘誓さんと道代

さんは津波の直前に城山に避難しました。

写真③では、庁舎前に、作業着に長靴を履いた地域整備課長の小川さんが現れます。町長の加藤さんは東棟前にある手押し式の井戸水ポンプの上部から水があふれ出ているのに気付いたらしく、そちらに歩を進めます。

公用車回せと木村圭治さん

東棟玄関前には、弘誓さんから手渡された白い携帯電話を手にする佐藤さんや藤原さん、携帯電話を横向きにして企画財政課の菊池信也・財務班主事とワンセ



役場があった新町に隣接の末広町で、職員の1人が受信した災害モバイルメール。右上に受信時刻「14:57」が表示されている

グ放送を見ているらしい同課長の木村さん、産業振興課長の佐々木さん、介護班主事の倉堀さん、監査班長の前川さんらがいます(写真④)。菊池主事の記憶ではワンセグ放送をうまく受信できず、木村さんはこの後、カーラジオを聞くために駐車場から公用車を回して行くよう同主事に指示します。

写真④では②と同様に多くの職員が携帯電話を操作しており、岩手県の災害モバイルメール「リアルタイム防災情報」を一斉に見ている可能性があります。

発災後2件目の同メールは盛岡地方気象台管内で震度6弱を観測したとの本震の情報を配信していて、庁舎周辺では午後2時57分に受信された記録が残っています。「57分」は写真②や④の推定撮影時刻と一致します。

澤舘純一さん、本部設置を指示

そして、この時まさに白いワイシャツ姿の総務課長の澤舘さんが東棟玄関から外に出ようとしていました(写真④)。このように度重なる余震が庁舎倒壊の恐れ



写真⑤



写真⑥

を増幅させ、従来なら総務課内に設置する災対本部を庁舎前に構える流れや雰囲気を方向づけていきます。総務広聴班長だった平野現町長の記憶では、前後して澤舘さんが町長を本部長とする災対本部の設置を命じました。赤崎・議会事務局長によると、企画財政課長の木村さんも「上(総務課)では危ないから、ここでやっ

ぺし」と話していました。

「施設の点検のために職員を待機させています」。地域整備課長の小川さんは庁舎前で災対副本部長の東梅副町長や澤舘さんに報告。このころ、裏庁舎の福祉課から黒澤・福祉班主任が本庁舎周辺の様子を探りに来ます。庁舎前で国保年金班長の里舘さんに状況を尋ね

ると、携帯電話を手に「停電で情報が入らないからワンセグを見ているよ」と応じました。井戸水ポンプの異変に気付いた町長の加藤さんはハンドルに手を掛け、津波の兆候と思われる水が噴き出す様子を観察し始めます(写真⑤⑥)。黒澤主任は「すごいですね」と話し掛け、大きな動きがないと判断すると再び裏庁舎に戻っていきました。

3 15時〜同10分

避難命じた関郁夫さん

裏庁舎の福祉課。北側玄関付近で大津波警報の防災行政無線を聞いた健康推進班長が急いで室内に入ると、本庁舎方面から戻ってきたらしい課長の関郁夫さんがいました。「私たち、もう逃げます」。同班長がこう告げると、関さんはすかさず命じます。「安全に気を付けて、全員避難しろ」。同班の阿部静子保健師がこの場面をよく覚えていました。

同班長も「貴重品を一つだけ持って、上（城山）に逃げて！」と大声を出し、班員の保健師たちや庁舎前から帰ってきた黒澤直美・福祉班主任が一気に呼応して避難を開始します。臨時職員の菊池則子さんはこの前後に末広町の自宅に向かったとみられます。姉眞理子さんによると、菊池さんは母綾子さん（2020年に逝去）を軽自動車に乗せて同町の蓮乗寺に避難させた後、「役場に行かなきゃ」と寺を後にします。

関さんは自宅に保管してある防災服に着替えてくる

と言い、自席の背後に掛けていた作業着かコートのよなものを羽織って、かばんを手に部屋を出ていきます。すぐに1階のロッカー室付近で、中野久実子・福祉班主任が応急医療キットを持ち出そうとするのを見とがめ、こう指示しました。「そんなことは後でいいから、まず町民に声を掛けながら上に逃げろ」。これに従って中野主査は黒澤・同班主任と行動を共にし、道すがら出会った妊婦を助けながら城山の斜面を上がります。健康推進班の保健師たちも主に末広町の家々の戸口で避難を呼び掛けたり、高齢者の車いすを押したりしつつ移動しました。

裏庁舎の北側玄関を抜けた関さんは職員駐車場に向かうために公道に出ます。そこで、大ケ口の緊急避難場所へ住民の誘導に行こうと、別の駐車場まで歩く澤舘和彦・財務班長とすれ違えます。関さんは、福祉課長として初の災害対応であることを意識してか「初めてのことだからよく分からなくてなあ」とつぶやきました。そして「着替えてくる」と伝え、澤舘班長と別れました。

関さんは役場の東側にある駐車場にセダンタイプで



健康推進班員らが避難を呼び掛けた末広町の町並み=2004年3月撮影

黒っぽいパープルの自家用車を置いていました。車に乗り込んだところで、隣接するアパートに住み、城山に避難しようとする姪、その3歳の長男と顔を合わせます。関さんはウインドー越しに「早く逃げろよ」と声を掛け、姪は「おじちゃんもね」と返しました。

さらにその後の時間帯。姪の安否を確認しに柵内地

区の職場から駆け付けた関さんの義弟は同じ駐車場で、車を降りてきた関さんと出会います。娘一家の不在を案じる義弟に、「娘は逃げたよ」と関さん。誰かをどこかに送ってきたようなことも言い、駐車場を後にして役場庁舎東棟の通用口に入って行きました。

関さんが役場を出発したのは午後3時ごろで、須賀町の自宅に滞在していたと仮定すると、戻ってきたのは同10分前後だと推測されます。また、自宅に向かう途中らしい関さんが役場西側の公道にいったん停車し、庁舎前の様子をうかがってから再び乗車する姿を、税務会計課の太田和浩・収納班主任が目撃していました。

臨時職員2人が室外へ

一方、裏庁舎2階で「ライフライン関係課」の地域整備課は午後3時ごろ、1階福祉課の避難の動きが伝わった様子もなく、全員が待機したままでした。2階産業振興課の小笠原佑樹・水産商工班主事は、用務で本町の岩手銀行大槌支店に入店しようとする時に本震

に遭い、御社地ふれあいセンター前で税務会計課職員が住民を避難誘導する姿を横目に見ながら裏庁舎に戻りました。この時、すでに玄関付近では福祉課職員が避難を始めていました。

小笠原佑樹主事は2階に上がる階段の途中、地域整備課から臨時職員の小國奈穂子さんと押野千恵さんが連れ立って出てくるのを見たといいます。しかし、この時間帯以降に2人が部屋にいたとの証言もあり、何らかの事情でいったん部屋を出てまた戻ったか、あるいは、同主事がさらに後の時間帯にも裏庁舎に出入りしていることから、部屋を出る2人を目撃したのはその時である可能性も否定できません。

末広町の御社地ふれあいセンターでは、課税班主任の上野芳子さんともう1人の同班主任が2階申告会場から私物のバッグなどを引き上げ、今後の指示を仰ぐために役場に行こうとします。2人は大津波警報が出た1年前のチリ地震津波で炊き出しをした経験などから、「今日も長くなりそうだね」と会話。「芳子、芳子」。その時、3階で踊りの稽古をしていた母ヒデさんが芳子さん呼び止めました。センターの玄関付近で、ヒ

デさんと婦人会連合会役員の高橋康子さんが「行かないで」と懇願しますが、「戻れないから」と振り切ります。センターを出た芳子さんらは途中、城山方面に向かう黒澤・福祉班主任らとすれ違い、役場に着きました。午後3時から同5分の間のことだと思われま

本部設営始まる

庁舎東棟玄関の周辺では災対本部設営の動きがにわかに慌ただしくなってきました。総務広聴班主任の藤原宏一郎さんが同課の若手職員らをしてきばきと動かしま

す。一方、総務課職員情報班主任の故花石一さんⅡ当時(25)Ⅱは正面玄関の前辺りで、独り言のようにこんなことをつぶやいていました。「これはもう、逃げた方がいいんじゃないか」

城山中腹に立つ中央公民館で地震に遭い、館内の安全確認などを済ませた伊藤正治教育長(災対副本部長)は城山の江岸寺墓地の斜面を急ぎ足で下り、避難してくる福祉課職員たちとすれ違いながら、午後3時5分ごろ、役場に到着。この時点で、総務課の職員が中心

となり、いすや長机を動かして始めていました。伊藤教育長と、さらにこの後に御社地ふれあいセンターから役場に来た田中恭悦・課税班長も町長の加藤宏暉さんが井戸水ポンプを観察する姿を目撃しており、加藤さんは井戸水の異変をずっと気にしていたようです。

財務班主事の鈴木有香里さんは長いコートを着け、東棟付近に心細そうな表情で立っています。末広町で住民に避難を促していた健康推進班の阿部静子保健師が車いすを調達しに本庁舎に来た際、その姿を見ていました。阿部保健師が中央棟玄関に入ると、町民生活班長の金崎健悦さんと同班主任の加藤国雄さんも町民課フロアにいたといいます。

鈴木さんは傍らにいる森田英之・課税班主任に「今日は（午前中）休みだったんです」と話し掛けます。

そのうち、不安が高じてしくしくと泣き始め、伊藤幸人・企画班長が「大丈夫だから」と慰めます。豪放な性格で知られる国保年金班長の里舘ひろ子さんは「泣くんじゃない!」と叱咤の声を上げました。里舘さんはまた、御社地ふれあいセンターから役場に着いた課税班主任が「おうちの犬が心配ですね」と声を掛ける



福祉課職員らの避難経路となった江岸寺墓地の斜面

と、「実はもう連れてきてあるの」と言い、「（自宅周辺の）床上浸水は免れないかな」と案じていました。午後3時6分と8分には岩手県沖が震源の余震が起き、釜石市でそれぞれ震度4と3を記録しています。中野・福祉班主査はこの時、避難の途中に末広町で出会った妊婦の乳児を抱き、城山の江岸寺墓地の斜面を

上がっている最中でした。立ってられないほどの大きな揺れで、思わずしゃがみ込んだといえます。

地域整備課に解錠要請

裏庁舎2階の地域整備課では動きがありました。城山の中央公民館にある生涯学習課の鎌田精造・社会文化班長が増え続ける避難者のため、冬季で閉鎖中だった城山公園の公衆トイレのシャッターを開けてほしいと、鍵を管理する地域整備課に電話で依頼します。応じた管理班長の三浦英人さんは災害対応上の理由などから課員や公用車の出勤に当初難色を示しますが、結局、同班の久保晴紀、小國慎也の両主事に鍵を届けるよう命じました。

柵内地区の後藤採鉱所において地震に遭った高木電気管理事務所代表の高木正基さんは中心街の町方地区に向かい、県道大槌小鏈線の渋滞が激しかったため末広町の御社地公園に駐車。その場で午後3時5分ごろ、前年のチリ地震津波の時に大町の排水施設「大町雨水ポンプ場」で浸水に備えて待機したことを思い起こし、



生涯学習課が地域整備課に解錠を要請した城山公園の公衆トイレ

指示を仰ぐようと地域整備課に電話をしたものの話し中でした。同課工務班主任技師の八幡力さんの携帯電話にも連絡を入れた記憶がありますが、やはり不通だったといえます。

農政班の関貴紀主査と白澤洋喜主事は車で担当の指定避難場所である小鏈神社などに向かいますが、午後3時過ぎ、役場前の県道大槌小鏈線で渋滞に巻き込まれます。白澤主事は降車して防寒着を着込もうと本町の自宅へ行き、関主査は車を裏庁舎北側の公道に回しました。同主査が2階の同課に立ち寄ってから階段を下りた時、階下から課長の佐々木良一さんが上がってきました。

「道が混んでたから戻ってきたんですけどまた（持ち場に）行ってきます」。「おう、そうか」。佐々木さんは何らかの用事があったて庁舎前から再び同課に来たようです。

4 15時10分 ～ 同20分

中村仁人さん、業者に安否確認

地域整備課で待機中の管理班主事の中村仁人さんは午後3時10分過ぎ、花輪田地区の下水処理場「大槌浄化センター」を運営するテツゲン東北支店の大槌事業所長佐々木智祐のりまささんに携帯電話で安否確認の連絡をします。佐々木さんが職員3人と共に車で上町の大槌小学校に避難した後、徒歩で城山に上がる途中であることを伝えると「それならよかったです」と応答。配管が大破するなどした同センターの被災状況についても通話したようです。

本部設営で慌ただしく

三浦義章・総務広聴班主事は井戸水ポンプに手を掛ける町長の加藤宏暉さんの姿を撮ってから17分後、再び災対本部周辺の状況を記録し始めます。このうち、推定午後3時15分撮影の1分間の連続写真5枚には、本部立ち上げで慌ただしく長机やパイプいすを運ぶなどする職員たちの姿が写り込んでいます。

写真⑦には長机を持ち上げる町民生活班主任の加藤国雄さんと監查班長の前川正志さん、いすに手を掛けていると思われる総務広聴班主事の小笠原広樹さん、その隣で指揮をしているように見える町民生活班長の金崎健悦さん、後ろ姿の産業振興課長の佐々木良一さん、置かれた長机の前に立つ総務広聴班主任の藤原宏一郎さんの姿があります。

中央棟1階町民室の窓から机を運び出す後ろ姿の作業着の人物は、御社地ふれあいセンターを出て大町の自宅付近で水路の状況を観察してから午後3時10分ごろに役場に到着した田中恭悦・課税班長です。町民室の窓枠の向こう側の室内から同班長に机を手渡してい



写真⑦

るのが出納班長の佐々木庸介さんだといいます。伊藤幸人・企画班長はこのころ、金崎さんが「もつといすが欲しい」などと声を上げるのを聞いています。この時、少なくとも会議用の長机3脚とパイプいす14脚が中央棟と増築された東棟の接合部付近、すなわち中央棟正面玄関と東棟玄関に挟まれたスペースに置

かれています。机の端には「大槌町災害対策本部」の木製看板が掛けられ、机上に町の都市計画図と思われる白地図も広げられています。総務課から看板を持ち出してきたのは藤原さんで、写真左端に写る伊藤正治教育長がその様子を目撃していました。

また、時系列で災害対応の経過を記入する「災害発生即対応表」が黄色のボードに張り出されていますが、設置したばかりなのか、まだ何も書かれています。黄色の自家発電機は18分前に撮られた写真と同じ位置にあります。三浦・総務広聴班主事の記憶では、この発電機はうまく作動せず、一連の写真には写っていないもつと大型の発電機を用いて東棟2階総務課にあった潮位計を動かしたといいます。

防災手帳に見入る藤原宏一郎さん

写真⑧⑨⑩の机の前では総務課長の澤舘純一さんと総務広聴班主任の藤原さんが並び立ち、澤舘さんは手にした携帯電話の画面に見入り、藤原さんは前年に職員全員に配布された「大槌町職員用防災手帳」に目を



写真⑧



写真⑨

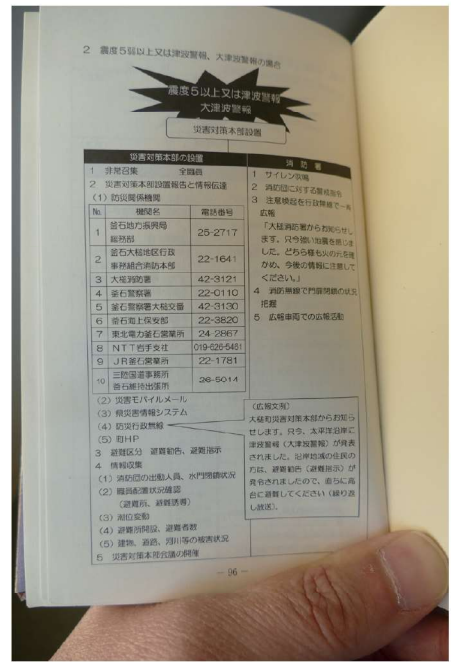
落としています。手帳には二つ折りにしたA4紙と思われるメモが裏表紙に近い所に挟んであり、上部に「小鍮川水門閉鎖 15:00」と走り書きされているのが認められます。

小鍮川河口と大槌湾を隔てる同水門は大槌消防署の2階から遠隔操作できるようになっており、当時の

佐々毅署長が津波に備えて閉鎖しました。メモは情報を聞いた藤原さん自身が書き込んだか、消防署員、あるいは署に立ち寄った役場職員によってもたらされた可能性があります。

藤原さんが持つ手帳の前半部分には、しおりの代わりに薄緑色の付箋が貼ってあり、それは震度5弱以上の地震発生や津波警報・大津波警報が

発表された場合に災对本部を役場の所在地に設置する決まり（仮本部の位置は中央公民館）を明記した12ページ目かもしれません。では、藤原さんの視線の先に開かれているのは何ページでしょうか。「水門閉鎖」のメモを挟んでいた箇所がもし裏表紙の内側（いわゆる表3）だとしたら、それは最終の96ページ、災对本部設置後の情報伝達や避難勧告・指示の発令、避難所開設といった手順のほか、防災行政無線のアナウンス文例などを示したマニュアルの部分ということになります。



藤原宏一郎さんが見入っていた可能性のある職員用防災手帳の96頁

次の瞬間、カメラは少し引いて、東棟玄関前の状況を広めに捉えます（写真⑩）。澤舘さん、藤原さんのほか、総務広聴班主事の佐藤一葉さんが手を胸の前で組むような格好で写り込んでいて、災対本部周辺では常に落ち着き払った態度だったといえます。

災対本部の黄色い腕章を着けた菊池信也・財務班主事の右側には、同主事が役場北側の駐車場から乗ってきた公用の白い軽自動車が止まっています。これは写真④（25ページ）で同主事と企画財政課長の木村圭治さんが携帯電話のワンセグ放送を受信できなかったため、カーラジオで情報を集めようと木村さんが命じて持ってこさせたものです。さらに同主事の左後ろ、東棟玄



写真⑩

関の前に同班主事の鈴木有香里さんの顔の一部と足元が見えます。写真⑪で長机は5脚並べられました。身振りをして何か話しているような町民生活班長の金崎さんや同班主任の加藤さん、総務広聴班主事の小笠原広樹さんがいます。平野公三・総務広聴班長はパイプイスを運び、



写真⑪

後ろ姿の伊藤教育長は本部設営の動きを見守っているようです。

この時間帯、庁舎前には約40人の職員がいたと推定されます。そのうち半数以上が町長や副町長、教育長、各課長、総務課職員など災対本部の運営に直接関わる人員。残りは指定避難場所や避難誘導などの担当に任

じられていない一般の職員たちで、慌ただしい動きがあった災対本部のテーブルから2〜3メートル離れた中央棟正面玄関の前辺りに待機し、何か指示があれば従おうという態勢でした。この中で出納班主事は「どうしていいか分からず」遠巻きに見守っていたといいます。

出動直前だった三浦徳幸さん

午後3時10分過ぎ、裏庁舎2階の地域整備課。城山公園の公衆トイレの鍵を携えた管理班の久保晴紀、小國槇也両主事が出動します。小國主事が1階ロッカー室でヘルメットや長靴で身支度してから同課に上がると、ドア付近の壁に張り出された模造紙の災害対応表に、同班主事の前川美知さんが時系列の記録を書き込んでいるところでした。

裏庁舎北側の駐車場の出入り口では、工務班主査の三浦徳幸さんがパトロール用の黄色い四輪駆動車のエンジンをかけ、海のある南側に車の頭を向けて止めていました。三浦さんは運転席右側の車外に立ち、カーラジオを聞いています。久保主事は「城山に行ってきた



三浦徳幸さんが出動準備をしていた裏庁舎(写真中央の2階建て)北側の駐車場=2003年8月撮影



釜石港に到達した津波と岩手県の津波予想高さ「6m」を報じるニュース映像=NHKの放送から

ます」と声を掛けて無線機を積んだ白い公用車のバンの運転席に、小國主事は助手席に乗り込んで走りだしました。

三浦大介・福祉班長は大津波警報発表後、沢山地区の大槌北小学児童保育室の状況を確認めに車で行こうとして渋滞に巻き込まれ、同乗していた部下を徒歩で同

小に向かわせてから引き返してきました。裏庁舎北側の駐車場に着くと、工務班主査の三浦徳幸さんから2人が一緒に携帯電話のワンセグ放送を見ていました。

「だー、津波が来てっぞ」。このころ、NHKでは宮古市や釜石市に到達した津波の様子が中継されており、午後3時14分から20分の間に2度、釜石港で車や

漁船が流されるなどする状況が映りました。城山に向かう小國・管理班主事は末広町の北日本銀行大槌支店付近の県道を走行中、釜石の映像に気付いたといいます。

「ここさいては(津波が)来っかもしれないから逃げた方がいいがねえ」。三浦大介班長はこう2人に話し掛けてから、公用車のキーを裏庁舎1階の福祉課に返却。課員が避難した後の室内は無人で、同班長は建物の中を通り抜けて隣接する中央棟に入って行きます。「早く津波のことを知らせ

ねえば」。停電で薄暗い1階の税務会計課や町民課には誰もいません。外光が差し込む中央棟正面玄関を出ると、災対本部の設営で忙しく立ち働く職員たちがいました。

その中で職員情報班主事の齊藤充さんは自家発電機のような機械を運んでいました。三浦義章・総務広聴班主事が推定午後3時15分に撮った写真⑨(35頁)では災害発生即対応表の後ろ側、東棟玄関前付近に後ろ姿の齊藤さんがいます。

計器観察する加藤宏暉さん

三浦大介班長は庁舎前で総務課長の澤舘さんや平野・総務広聴班長を探し回りますが、見つけれませんが。平野班長はこの時間帯、役場の東側を流れる水路(沼崎川)の様子を観察しに行っていて不在だった可能性があります。三浦班長が東棟2階の総務課に上がると、町長の加藤さんらが潮位計らしい機器を観察していました。「町長、津波が来てるそうです!」。あわてて伝えますが、加藤さんの反応は鈍かったといえます。

三浦班長は再び庁舎前に下り、避難誘導の人員が手薄だと判断した御社地ふれあいセンター方面に走って行きます。津波が襲来したのは、それから間もなくのことでした。

裏庁舎と本庁舎の間を往復していた小笠原佑樹・水産商工班主事も、裏庁舎北側の駐車場で工務班主查の三浦徳幸さんが四輪駆動車の脇に立ち、カーラジオから流れてくる津波の情報を周囲に伝えるのを聞いていました。また、管理班主事の前川美知さんと臨時職員の前野千恵さんが連れ立って、裏庁舎の玄関から出て行ったとの情報があります。小笠原主事は前述のように、この時間帯に臨時職員の前野さんと小國奈穂子さんを裏庁舎の階段で目撃した可能性が捨て切れず、先の情報と小笠原主事の証言を総合すると、前川さん、前野さん、小國さんの3人は何らかの指示があつて午後3時15分前後に裏庁舎を後にしたのかもしれませんが。

六串俊範さんら車で役場方面へ

このころ、産業振興課農政班主查の故六串俊範さん



兼澤圭作さんがトラクターを止めた新山牧場の事務所周辺。中央の車は実際に兼澤さんが運転してきたものだという



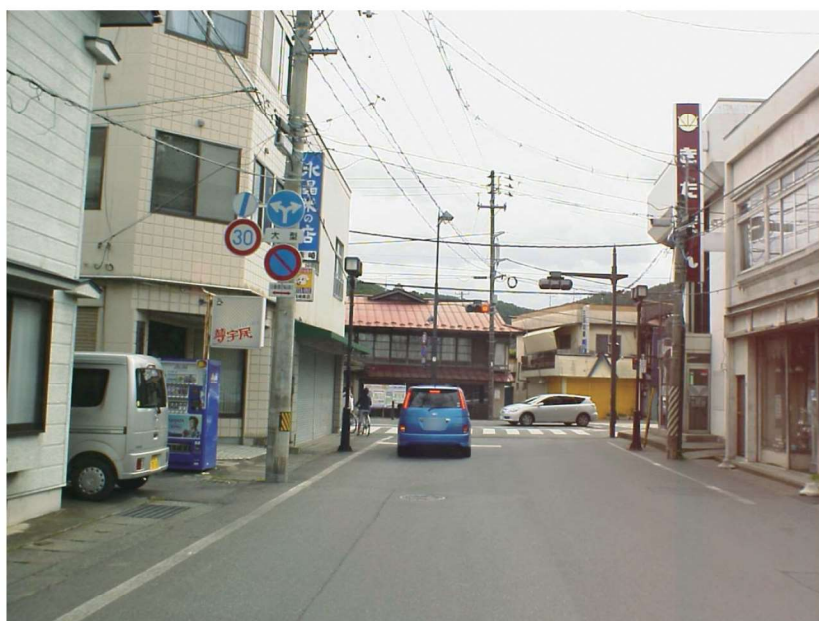
役場方面（右側）に向かう六串俊範さん運転の車が目撃されたJR大槌駅（当時）付近の県道交差点=2008年9月撮影

Ⅱ当時(46)Ⅱの運転する公用車の白いバンが県道大槌小鎚線、上町の小鎚神社の参道入り口付近を役場方面に向かって通過しようとしています。六串さんは新山牧場に除雪用トラクターを置いてきた畜産振興公社職員の間兼澤圭作さんを迎えに行った帰途で、同班臨時職員の故佐野雅樹さんⅡ当時(29)Ⅱも同乗していました。の

ちに同牧場の事務所付近にトラクターが止めてあったのが確認されていて、周辺の公道を除雪する目的だったと思われる。

小鎚神社参道入り口付近で住民の避難誘導に当たっていた町民課の太田信博・町民生活班主任が公用車に気付き、手を振ると停車。ウインドーが開き、運転席

の六串さんは「大丈夫だべか」。「いやあ、行かねえ方がいいんじゃないすか」と太田主任。六串さんは「分かった、分かった」と言いつつも、そのまま東進します。約160以先の大念寺参道入り口付近の県道で、避難誘導担当の材津祐貴・福祉課介護班主事が同じ車を目撃します。そこからさらに約300以離れたJR大槌駅（当時）入り口付近の県道では、指定避難場所の小鎚神社に向かうために車で西進中だった関貴紀・農政班主査



阿部久美子さんらを乗せる車が通過した北日本銀行付近の県道交差点。左側が役場方面＝2008年9月撮影

も、スピードを上げて急ぐその車を見ていました。六串さんらの後、釜石市の研修会場から戻ってくる途中の地域包括支援センター班長の阿部久美子さん、社会福祉士の小笠原裕香さん、臨時職員の岩間成子さんの同乗する白い軽自動車も小鍬神社前の県道を通り、一瞬、太田・町民生活班主任と小笠原さんの目が

合います。車はさらに進んで、材津・介護班主事の前には止まります。

「みんな、どうしてる?」。材津主事の記憶では、車内から阿部さんが尋ねました。本震の直後に裏庁舎から大念寺に向かった材津主事は「俺、すぐ出て来ちゃったんで、ちょっと分からないんです」と答えます。発進した軽自動車は末広町の北日本銀行大槌支店付近の交差点を通過し、城山公園の公衆トイレの鍵を開けに向かう地域整備課管理班の久保、小國両主事の乗る公用車とすれ違いました。

加藤宏暉さん、総務から本部へ

再び、庁舎前に目を転じます。城山の中央公民館から下りてきた伊藤正治教育長は推定午後3時15分撮影の写真⑦(34ページ)⑪(37ページ)に納まった後、潮位計を観察しに東棟2階の総務課に上がった町長の加藤さんの後を追います。津波の翌12日に記した教育長自身のメモなどによると、加藤さんは2階の窓から「2メートル」の潮位計の数値を下の災対本部に伝え、再度同本部に

下りて行きます。伊藤教育長はそのまま総務課に居残り、津波襲来まで潮位計の変動を災対本部に実況し続けました。この前か後、伊藤幸人・企画班長は加藤さんと総務課長の澤舘さん、企画財政課長の木村さん、町民課長の佐々賢一さんが災対本部のテーブルで町の白地図を囲んでいる姿を目にしています。

「お父さんは役場にいます」。福祉課長の関郁夫さんは、妻信子さんといち早く城山に避難した長女が午後3時12分に携帯電話のメールで安否を問うと返信し、当時仙台市に住んでいた次女の身を案じました。記録された返信の時刻は同15分でした。

5 津波1分前〜津波襲来

住民情報持つて歩きだす

津波が役場庁舎を直撃する1分前、三浦義章・総務広聴班主事は災対本部周辺の状況を3枚の写真に収めていました。

写真⑫では、設営が終わったと思われる災対本部のテーブルの脇で総務課長の澤舘純一さんが平野公三・総務広聴班長と向き合い、城山方面を指さして声を発しているようです。この時間帯、平野班長が澤舘さんに「このままいては、やばいんじゃないでしょうか」と問い掛けると「ああ、まずいな」と同意したと



写真⑫

いいいます。

同じ写真で澤館さんの右横にいる職員情報班主事の花石一さんは、リュックサックのストラップのようなものを肩に掛け、澤館さんの話に耳を傾けているように見えます。森田英之・課税班主任は、花石さんがリュックを背負って災対本部に現れ、「D A T^{ダット}を持つてきました」と言うのを聞いています。

D A Tとは住民基本台帳や戸籍などの住民情報を記録した磁気テープのことで、総務課で毎日データをバックアップしていました。さらに伊藤幸人・企画班長は城山方面に向かって歩いて行く花石さんの後ろ姿を見ていました。菊池信也・財務班主事はこの時、職員情報班主事の齊藤充さんも一緒だったと記憶しています。花石さんは常に上司から非常時には必ずD A Tを持ち出すように指導されていたといっています。

写真③(25頁)で作業着の上下だった地域整備課長の小川千里さんは写真⑫では防寒着とヘルメットを着けていて、いったん同課のある裏庁舎に戻ったらしいことが分かります。1階のロッカー室で装備したのかもしれない。町民生活班長の金崎健悦さんは、森田・

課税班主任と会話しているようです。金崎さんはこの時「やばいぞ、これ」と話していたといっています。

津波直前まで記録取る

さらにその後方では、後ろ姿の国保年金班長の里館ひろ子さんが税務会計課長の祝田眞悟さんと向き合っているように見えます。正面玄関前の松の囲いに置かれた水玉模様の青い手提げバッグは、御社地ふれあいセンターから戻った課税班主任の上野芳子さんの私物かもしれない。上野さんはバッグを同僚の出納班主事に預け、「町内に住む親戚の様子が心配だから見てくる」といったん役場を後にしたといっています。

写真⑬で、町民課長の佐々賢一さんと企画財政課長の木村圭治さんが並んでテーブルに着き、作業をしています。机上には鉛筆や付箋、セロハンテープなどの文房具のほか、企画財政課の震度計から吐き出されたと思われるロール紙があります。佐々さんはロール紙の数値を読み上げ、隣の木村さんがそれをメモ帳に転記しているように見えます。写真が撮影されたと推定



写真⑬

される午後3時20分ごろまでに本震と余震を合わせて14回の地震が観測されており、木村さんはその時刻と震度を記していたのかもしれませんが。コートの左胸のポケットには職員用防災手帳を入れています。

東棟玄関に近い災害発生即応対応表の前では、総務広聴班主事の佐藤一葉さんと小笠原広樹さんが立って



写真⑭

います(写真⑭)。佐藤さんは青いペンを右手に持ち対応表に何らかの情報を書き込んでいる最中、左隣の小笠原さんは走り書きのメモらしいものに目を通しているようです。時系列の「対応内容」の欄には上から「報発令」「設置」「から救出済」の文字が見え、いづれも佐藤さんの筆跡と思われる。この5分前の写真

⑨(35頁)などに写る対応表にはまだこれらの文字はありません。

この直前か直後、午後3時15分ごろに釜石市から戻った総務課の四戸直紀・総務広聴班主事が浪板地区の浪板川で軽自動車が流されているとの無線機の情報を聞き、対応表に記入しようと思いますが、動揺のあまりペンを持つ手が震え、どうしても「浪」の字が思い出せません。「ああ、駄目だ」とつぶやくと、見かねた小笠原さんがペンを受け取ってくれました。

城山移動を検討か

町民課の平野正晃・国保年金班主事によると、津波の少し前、災対本部のテーブルから少し離れた銀行の現金自動預払機のそばで介護班主事の倉堀健さんが「早く城山に行かなきゃ」と周囲に漏らし、歩きだしました。平野主事は、倉堀さんが本部中枢で城山への移動を検討している雰囲気を感じ取り、進まない事態にしびれを切らしたような様子が印象に残っているといます。

津波が町中に迫りつつあった午後3時20分ごろ、消防署が防災行政無線で高台避難を呼び掛ける2度目の放送をします。NHKは釜石港が浸水する状況を3時14分から20分にかけて中継しており、それを見た白澤岳副士長がアナウンスしました。消防署の放送は、小笠原純一・学務班主任が城山から携帯電話で町内を撮影した動画に録音されており、津波がJR大槌駅(当時)付近に到達した3時21分にチャイム音と共に終わっていました。直後、消防署にも津波が押し寄せ、白澤副士長はぎりぎり署の屋上に逃げ延びました。

澤舘純一さん、高台退避を号令

総務課長の澤舘純一さんはいかに城山への退避を号令します。少なくとも4人の職員——平野正晃・国保年金班主事、四戸・総務広聴班主事、森田・課税班主任、小笠原佑樹・水産商工班主事が澤舘さんの声を聞いていました。発言内容の記憶は少しずつ異なります。「城山、移動!」「もうやめ、やめ。城山行くぞ!」「ここにおいてもどうにもなんねえ」「行くぞー!」。菊池信也・

財務班主事は声の主を覚えていませんが、「(誰かが)一部で発した(退避を呼び掛ける)声」がざわざわと広がっていった」と思い起こします。

前後して岩手東海新聞記者の故佐々木正樹さん(当時57)のシルバーの乗用車が県道大槌小槌線から庁舎前に入ってきて来て、正面玄関の前を左に曲がります。同級生で親しい友人だった国保年金班長の里舘さんが車に駆け寄って行くのを、赤崎仁一・議会事務局長が近くで見えていました。このすぐ後のタイミングなのか、森田・課税班主任によると、里舘さんは「炊き出しに行ってくる」と周囲に声を掛け、東棟玄関に入っていました。里舘さんの車は飼犬を乗せたまま東棟東側の公道に止めてありました。

津波知らせた佐々木庸介さん

この直後のことでした。「津波だー!」。ひととき大きく、男性の叫び声が響き渡りました。当時災対本部周辺にいて、今回の聞き取りに応じた15人全員が聞いており、そのうち13人が出納班長の佐々木庸介さんの

声だと記憶。さらに2人は正面玄関の庇ひさしの下、自動ドアの前に立つ佐々木さんの姿を覚えていました。その位置からは、約500メートル先に海があり家屋の立ち並ぶ南の方角がまっすぐ見えます。これとは別に、正面玄関に直面する電話ボックスのそばに佐々木さんが立っていたり、向かいのガソリンスタンドの方から声が聞こえたりしたなどという証言もありました。

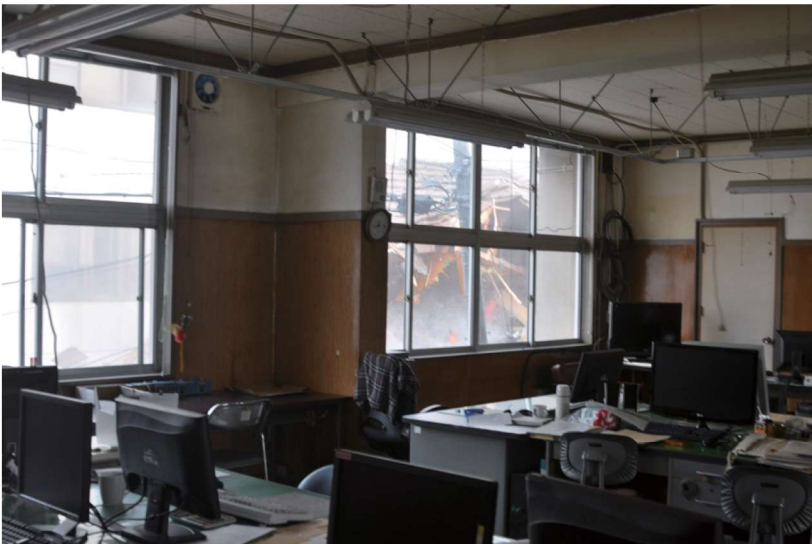
大津波は町を取り囲む海面からの高さ6・4メートルの防堤と、役場から東に約200メートルの大槌川に沿う河川堤防をたやすく乗り越えて市街地に流入。黄色い土煙を上げながらすすまじい速さで家々をなぎ倒し、巨大な「黒い壁」となって職員たちの目の前に迫っていました。

庁舎前の職員たちは一目散に中央棟と東棟の玄関、西棟の外階段に駆け込みます。庁舎周辺で生還した職員21人のうち少なくとも12人が中央棟、3人が東棟、2人が西棟に逃げたとみられ、屋上などに避難しました。

三浦義章・総務広聴班主事は伊藤幸人・企画班長と東棟2階の総務課に入り込み、東側の窓から国保年金班長の里舘さんの車に津波が直撃(写真⑮)し、同じ



写真⑮



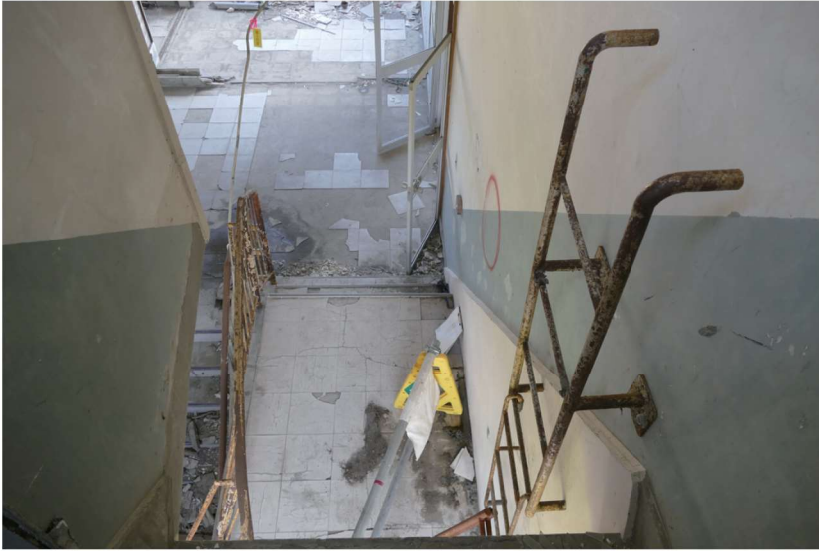
写真⑯

窓を今にもがれきが打ち破ろうとする状況(写真⑮)を撮影。デジタルカメラの時計が約5分進んでいたと考えると、役場に津波が到達した時刻は午後3時21分ごろということになります。総務課で潮位計を見ていた伊藤正治教育長も一緒に中央棟に向かって廊下を走りますが、3人とも濁流にのまれてしまいます。

税務会計課の出納班主事と課税班主任が中央棟の階段を2階に上り切ると、海のある南側に窓の開くフロアが眼前に広がります。そこでは出納班長の佐々木庸介さんがたたずみ、窓の外を見ていました。2階から屋上に通じる踊り場の先には階段が3段しかなく、代わりに、西側の壁面に計7段の鉄製のはしごが取り付けてありました。職員たちはそこに殺到します。もともとあった階段4段目以上は昭和54(1979)年に中央棟に密着させる形で鉄骨造2階建ての庁舎を増築した際、二つの建物の間を行き来するために壁を打ち抜く過程で撤去されていました。

女性助ける金崎健悦さん

屋上に至った職員21人のうち15人がこのはしごをよじ登り、残り6人は庁舎内で津波に巻き込まれ



津波襲来時、職員が伝った中央棟2階の鉄製はしご。金崎健悦さんが上がろうとする女性職員を助けていたという=2018年6月撮影

た後に助け上げられたり、天井裏に逃れたりして九死に一生を得ました。課税班主任の記憶では、町民生活班長の金崎健悦さんがはしごを上ろうとする女性職員を助けていました。

中央棟北の増築庁舎2階には、既存庁舎との接合部に面する廊下を挟んで、内部が仕切れる構造の東西に

長い会議室がありました。はしごを上らずに横切り、まっすぐ会議室に逃げ込んだ人もいました。同じ行動を取った平野正晃・国保年金班主事は亡くなった複数の男性職員の姿を見ているますが、それが誰だったかは確信が持てないといえます。平野主事ははしごで滞る女性職員を助けようと引き返し、そのまま屋上に逃れました。

四戸・総務広聴班主事は、はしごの下で女性職員を押し上げている最中、膝の高さまで来た水の勢いで転倒し、増築庁舎側に流されました。とっさに会議室に入り、北側の窓の近くにあった長机に飛び乗ると、総務課長の澤舘さんが水をかき分けながら歩いて現れます。澤舘さんが出入り口の引き戸近くの長机に上がり、お互いの目が合った次の瞬間、水の塊がどっと入り込んできて天井に達しました。四戸主事は溺れそうになりながら水圧で破れた会議室の北面の壁から脱出し、水の上に顔を出しましたが、近くに澤舘さんの姿はありませんでした。

はしご周辺の記憶は混乱

証言を総合すると、鉄製はしごに最初に手を掛けたのは森田・課税班主任で、二番目に平野公三・総務広聴班長、三番目に小笠原佑樹・水産商工班主事が続いたとみられますが、その後の12人の順序はよく分かりません。はしご周辺の状況は証言者によって記憶がまちまちで、極度の混乱状態だったことがうかがえます。はしごの5段目に足を掛けたすぐ右側には既存の踊り場が突き出っていて、そこから幅約1段・10段ほどの狭い階段を上がると、屋上に出るノブの付いたアルミ製のドアが現れます。このドアは立て付けが悪くてすぐに開かず、避難した職員は踊り場北面の窓から屋上に足を踏み出したようです。

逃げ遅れた本部要員

中央棟玄関前で待機していた、主に災対本部で役の付いていない職員たちは、ほぼ直線的な移動による最短距離で中央棟の階段を駆け上がることができまし

た。はしごを上った15人の大半はそのような人員でした。一方、幹部職員や総務課員の多くは中央棟玄関より東棟玄関に近い災対本部のテール付近にいて、中央棟に向かってまっすぐ走れなかったり、東棟に入ったりして逃げ遅れたものと考えられます。

実際、東棟玄関に逃げ込んだ伊藤幸人・企画班長と三浦義章・総務広聴班主事は中央棟のはしごまで至ることができず、中央棟と東棟の2階接合部付近で津波に巻き込まれています。しかし、犠牲職員の誰がどの方向に走って行ったかは、中央棟2階の窓際で目撃された出納班長の佐々木庸介さんを除き、具体的な証言がほとんど得られませんでした。

地域包括支援センター班長の阿部久美子さん、福祉士の小笠原裕香さん、臨時職員の岩間成子さんを乗せた軽自動車は、午後3時15分過ぎに県道大槌小鍬線で城山に向かう地域整備課の公用車とすれ違った後、役場まで到達できず、末広町で津波に襲われました。



津波にさらされる役場庁舎（奥の建物）。屋上の塔屋に職員が逃げ込んでいるのが見える＝2011年3月11日午後3時25分、植田俊郎さん撮影

6 15時25分ごろ～翌朝

佐藤一葉さんに似た女性が

再び役場屋上です。逃げ延びた15人はさらなる津波

の襲来を恐れ、程なくして屋上の階段室に突き出た塔屋にはしごを伝って上がります。眼下では大荒れの海のように黒い水が波打っています。庁舎内で津波に巻き込まれた三浦義章・総務広聴班主事と伊藤幸人・企画班長は東棟2階北端のトイレに流され、水中をもがいてガラスの破れた窓から外に抜け出ます。伊藤正治教育長は中央棟2階東南角の副町長室前の廊下で水にのまれますが、水圧で倒れてきた壁に乗り、かろうじて同室の屋根裏に逃れます。

三浦主事がトイレ横の水面に顔を出すと、そこから北側の少し離れた所に四戸直紀・総務広聴班主事と監査班長の前川正志さんが漂流していました。前川さんの位置については、聞き取りに応じた最初期の屋上避難者13人の大半が中央棟北増築部分の東側と東棟北側に挟まれた一帯だったと記憶しています。

四戸主事は、自身より3歳ほど西側でメガネの外れた前川さんが顔だけを出して浮かんでいたのを見ました。さらに西側の奥では総務広聴班主事の佐藤一葉さんに似た黒髪の女性が流されていました。

この女性と同一かもしれない人物が家屋のベランダ

のような物にしがみついていたのを、小笠原佑樹・水産商工班主事と平野正晃・国保年金班主事が覚えています。平野主事は女性に「もっと上が上がって」と声を掛けますが、無言だったといいます。

三浦義章主事と伊藤幸人班長は自力で東棟屋上によじ登りました。そこに、隣接する中央棟2階副町長室の東側の天井裏窓から伊藤正治教育長はい出てきて、合流します。3人は中央棟屋上の塔屋から下りてきた数人の手を借りて、2・5メートルほどの段差がある中央棟側に上がりました。間もなく、2回目の大きな波が東棟屋上をさらっていきました。

家の屋根にしがみついた四戸主事は、この波で北西に約400メートル離れた県立大槌病院の手前まで持って行かれ、さらに引き波で500メートル海側に戻されたものの、大槌川河口の大町雨水ポンプ場のバルコニーに飛び乗って危機を脱しました。

前川正志さんに垂れ幕投げる

平野正晃・国保年金班主事、小笠原佑樹・水産商工

班主事、赤崎仁一・議会事務局長らは、流されている監査班長の前川正志さんの救助に乗り出します。屋上には平成21(2009)年の町制施行120周年を祝うビニール製の垂れ幕が置いてありました。その先端に金具や重りになりそうなバッグ状の物を結び付けては取り換え、中央棟北増築庁舎の東のへりから何度も投げますが、垂れ幕は幅が広く、それ自体に重さがあった、どうしても遠くまで届きません。

前川さんはひしめくがれきの間で、大きな屋根のような物につかまっていました。「上が上がれ」「がんばれ、がんばれ」。職員たちの励ましに表情で応えているようでしたが、水に浸かり凍えて消耗したためか、自ら声を発することはありませんでした。伊藤・企画班長や赤崎・議会事務局長の記憶では、前川さんは2回目の大きな波の次の引き波に連れて行かれ、見えなくなっていました。

海に吸い込まれた裏庁舎

平野公三・総務広聴班長は塔屋の上から、津波の威

力で木造の裏庁舎が根こそぎ浮かび上がるのを見ていました。建物は北西に約400メートル、大槌病院の手前まで流された後、引き波に戻されて役場庁舎の西側を通り、300メートル離れた大槌川河口の河川堤防の切れ目から海に吸い込まれていったといいます。建物の中では男性らしい複数の職員が動いているのも遠目に見えたということです。

屋上の職員は最初にはしごを上がった15人に伊藤正治教育長ら3人が加わり、さらに西棟の屋根裏に逃れた税務会計課の祝田茂・収納班主査と太田和浩・同班主任ら3人が日没後に合流、21人になりました。夜、大きな車座になって垂れ幕を体に巻き付け、水が引いた後に庁舎内で拾った木の切れ端でたき火をするなどして、厳しい寒さをしのぎました。翌12日午前9時半ごろ、職員らは飛来した航空自衛隊の大型輸送ヘリに救助され、西に約2キロ離れた寺野地区の屋内運動場に避難しました。



役場周辺で避難者を救助する自衛隊の大型ヘリ＝2011年3月12日、植田俊郎さん撮影

発災後の役場周辺などの主な出来事

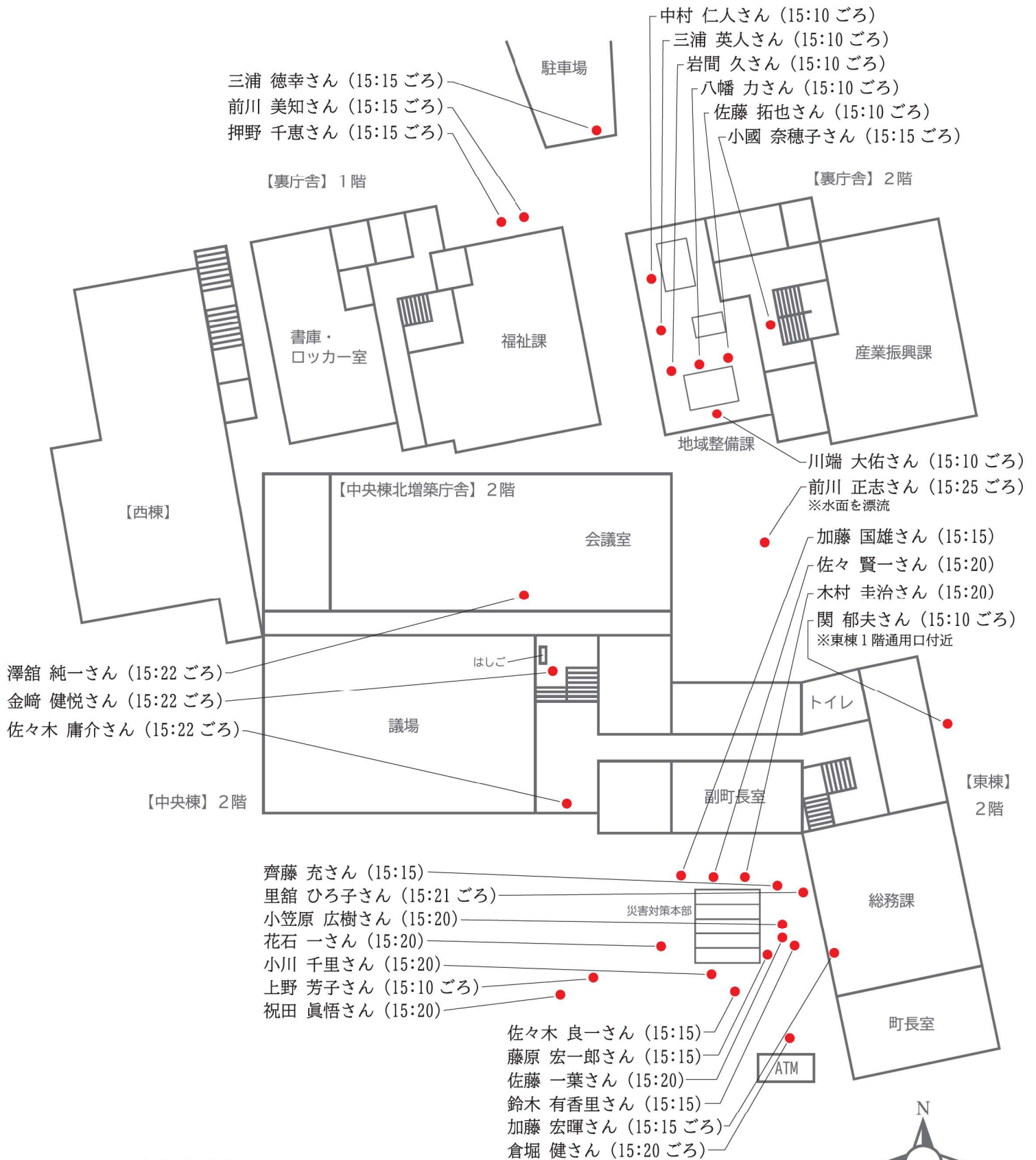
3/11 14:46	三陸沖震源の本震（震度6弱）発生
14:48 過ぎ	役場にいた職員約50人の多くが庁舎前などに出てくる
14:49	気象庁が岩手県に大津波警報と3㍎の津波予想高さを発表
14:50 ごろ	地域整備課長小川千里さん、課員に待機を指示
14:51	福島県沖震源の余震（震度3）発生
14:56 過ぎ	消防署が防災行政無線を放送し、高台避難を呼び掛ける
14:57	町長加藤宏暉さんら多くの職員が庁舎前に集まっている
14:57 ごろ	総務課長澤舘純一さん、災対本部設置を指示
14:58	町長加藤さん、役場の井戸水ポンプを観察
14:58	福島県沖震源の余震（震度3）発生
15:00 ごろ	福祉課長関郁夫さん、課員に城山への避難を指示
15:05 ごろ	生涯学習課が地域整備課に城山公園トイレの解錠要請
15:06	岩手県沖震源の余震（震度4）発生
15:08	岩手県沖震源の余震（震度3）発生
15:10 過ぎ	農政班主査六串俊範さんら3人の乗る公用車が役場方面に向かい、JR大槌駅（当時）付近の県道を通り
15:12	福島県沖震源の余震（震度3）発生
15:14	気象庁が岩手県の津波予想高さを6㍎に引き上げ
15:14	NHKのテレビ・ラジオ同時放送が釜石港への津波到達を報道
15:15	茨城県沖震源の余震（震度3）発生
15:15	災対本部の設営作業進む
15:15 ごろ	工務班主査三浦徳幸さん、裏庁舎北側駐車場で出動準備
15:15 ごろ	町長加藤さん、総務課で潮位計を観察
15:15 過ぎ	地域包括支援センター班長阿部久美子さんら4人の乗る軽自動車役場方面に向かい、北日本銀行付近の県道交差点を通り
15:20 ごろ	消防署が防災行政無線を放送し、高台避難を呼び掛ける
15:20	総務課長澤舘さん、災対本部で城山方面を指さす。この後、城山への退避を号令
15:21 ごろ	大津波が役場庁舎に到達。出納班長佐々木庸介さんが大声で危機を知らせる
15:22 ごろ	職員15人が中央棟2階のはしごを伝って屋上に避難。その後、6人が合流
15:25 ごろ	監査班長前川正志さん、総務広聴班主事佐藤一葉さんに似た女性が中央棟北側の水面を漂流
3/12 9:30 ごろ	屋上の職員21人が自衛隊の大型ヘリによって救出

※地震発生や気象庁の発表、NHK報道以外の時刻は推定。地震は釜石市で震度3以上を観測したものを記載

第2章 最終目撃情報のまとめ

現時点で分かる犠牲職員の最後の目撃情報や類推される行動を改めて書き起こします。

犠牲職員の推定最終目撃地点（庁舎建物内外）



犠牲職員の推定最終目撃地点（町内）



津波到達推定時刻 = 15:21

※かっこ内は推定目撃時刻

※地図データは震災当時

1 町長

町長の加藤宏暉さんは午後3時15分過ぎ、潮位計を観察していた東棟2階の総務課から庁舎前の災対本部に下り、総務課に残った伊藤正治教育長と潮位計の数値をやり取りしていました。前後して災対本部のテーブルで、総務課長の澤舘純一さん、企画財政課長の木村圭治さん、町民課長の佐々賢一さんと町の白地図を見ていました。

2 総務課

総務課長の澤舘純一さんは津波襲来時、中央棟玄関から東棟玄関から2階に駆け上がり、水をかき分けながら中央棟北増築庁舎の会議室に入ります。出入り口に近い長机に上がってすぐ、津波に巻き込まれました。

総務広聴班主任の藤原宏一さんは推定午後3時15分撮影の写真⑨(35ページ)で、災対本部前で職員用防災手帳に見入っていました。この前後、写真を撮っていた

た三浦義章・同班主事は藤原さんと親しく会話した記憶があります。

総務広聴班主事の小笠原広樹さんは推定午後3時20分撮影の写真⑭(44ページ)で、災対本部の災害発生即応対応表の前に同班主事の佐藤一葉さんと並んで立っています。この前後、同表に情報を書き込もうとする四戸直紀・同班主事の手が震えるのを見かね、ペンを受け取りました。

総務広聴班主事の佐藤一葉さんは津波の後、よく似た人物が本庁舎北側周辺の水面でベランダのような物につかまって流されていました。

職員情報班主事の齊藤充さんと花石一さんは津波のほぼ1分前、城山方面に向かって歩き始めました。花石さんは住民情報の記録された磁気テープを携えていました。2人は末広町近辺で被災した可能性があります。

3 企画財政課

企画財政課長の木村圭治さんは推定午後3時20分撮影の写真⑬(44頁)で、災対本部のテーブルに町民課長の佐々さんと並んで着いていました。佐々さんは震度が印字されていると思われるロール紙を読み込み、木村さんは隣でノートに記入しています。

財務班主事の鈴木有香里さんは推定午後3時15分撮影の写真⑩(36頁)で、同課のある東棟の玄関付近に立っています。その前の時間帯に同じ場所で不安げな表情を浮かべたり、泣いたりしているのを複数の職員が目撃しています。

4 税務会計課

税務会計課長の祝田眞悟さんは御社地ふれあいセンター前で確定申告の来場者や町民を避難誘導した後、推定午後3時20分撮影の写真⑫(42頁)に納まり、中央棟玄関前で町民課国保年金班長の里館ひろ子さんと

対面しているようでした。

課税班主任の上野芳子さんは午後3時5分ごろに用務先の御社地ふれあいセンターから徒歩で役場に戻った後、町内に住む親戚の安否を確認しに、いったん出て行きました。親戚は当時大町在住の伯父三浦幸之助さん(2015年に逝去)で、上野さんが役場を出た時間帯はデイサービスに出掛けていて不在でした。三浦さん宅では三浦さんの長男夫妻と上野さんの母ヒデさんが合流し、城山に向かって避難した後でした。

主幹兼出納班長の佐々木庸介さんは庁舎前で津波の襲来を大声で告げた後、中央棟の階段を上り、2階の窓から海の方角を見ていました。

5 町民課

町民課長の佐々賢一さんは、東棟2階総務課の潮位計を見て「吉里吉里漁港は潮位2.44」と窓の外の災対本部に伝えるのを、森田英之・課税班主任が記憶しています。時間帯は、災対本部で企画財政課長の木村

さんと並んで写真に納まる午後3時20分ごろより前だと考えられます。

主幹兼町民生活班長の金崎健悦さんは津波襲来時、屋上に通じるはしごの下で女性職員が上がるのを手伝っていたのが目撃されています。

町民生活班主任の加藤国雄さんは推定午後3時15分撮影の写真⑦(34頁)で、机やいすを運ぶなど災対本部の設営に従事していました。加藤さんは用務先の安渡地区の漁協から午後3時前に役場に戻っていました。

主任主査国保年金班長の里舘ひろ子さんは津波の直前、庁舎前に入ってきた岩手東海新聞記者佐々木正樹さんの車に駆け寄った後、炊き出しの準備をしてくると言っって自家用車をそばに止めた東棟に入っっていきました。里舘さんは前年のチリ地震津波でも城山の中央公民館で炊き出しを陣頭指揮していました。

6 福祉課

福祉課長の関郁夫さんは地震の後、須賀町の自宅で防災服に着替えてくると言っって役場を出た後、職員駐車場で義弟と出会っっています。義弟は役場に入る関さんを見ていました。午後3時15分、長女からの安否確認の携帯メールに「役場にいる」と返信しました。

介護班主事の倉堀健さんは災対本部担当の職員で、津波の少し前、本部を城山に移そうとする中枢の意向を察し、城山方面に歩き始めたようでした。

主任主査地域包括支援センター班長の阿部久美子さんと社会福祉士の小笠原裕香さん、臨時職員の岩間成子さんは、用務先の釜石市から公用車に同乗して役場に戻る途中、大念寺付近の県道で避難誘導中の材津祐貴・同課介護班主事と阿部さんとのやり取りがあつた後、末広町で津波に巻き込まれました。

臨時職員の菊池則子さんは課員が避難を開始した午後3時ごろ、末広町の自宅に行き、母親を軽自動車です同町の蓮乗寺に避難させた後、役場に戻ると言っって残して母親と別れました。

7 産業振興課・畜産振興公社

産業振興課長の佐々木良一さんは午後3時過ぎに庁舎前から裏庁舎2階の同課に行った後、再び災対本部に戻り、推定午後3時15分撮影の写真⑦(34ページ)などに写っています。

農政班主査の六串俊範さんと臨時職員佐野雅樹さんは、新山牧場に除雪用のトラクターを置いてきた町畜産振興公社職員の兼澤圭作さんを、六串さん運転の公用車で迎えに行きました。午後3時10分過ぎ、町方の県道大槌小槌線を走る車を複数の職員が目撃しています。佐野さんは後部座席にいて、兼澤さんは助手席でグレーのキャップをかぶっていたと、車ですれ違った関貴紀・同班主査は記憶しています。車が津波襲来前に役場に到着できる時間的余裕はあったと思われるのですが、役場周辺での3人の目撃証言は得られませんでした。

一方、津波の翌朝、同じ車が運転席と助手席のドアが開いた状態で、新町の県立大槌病院南側の公道の路肩に止まっていたとの情報があります。目撃した那須

智・総務課職員情報班長は、どこかで乗り捨てられた車が現場に漂着したような印象を持ったといいます。

8 地域整備課

裏庁舎2階の地域整備課は前述のように、当日出勤していた13人中11人が犠牲になりました。管理班の小國楨也、久保晴紀の両主事が指示を受けて城山に出発した午後3時10分過ぎの時点で、災対本部にいた課長の小川千里さんと、施設点検に備えて駐車場に下りていた工務班主査の三浦徳幸さんを除く9人が在室していたとみられます。

その後管理班主事の前川美知さん、臨時職員の小國奈穂子さんと押野千恵さんの女性3人が退出した可能性があり、もし三浦さん以外の工務班員が出勤していなければ、津波襲来時、男性6人が室内に残っていたかもしれません。小國、久保両主事は城山公園体育館の真下の坂道で渋滞のため停車し、車載の無線機から同課に連絡しますが、応答がありませんでした。こ

の時、すでに津波が到達していた可能性があります。

地域整備課長の小川千里さんは推定午後3時20分撮影の写真⑫(42ページ)で、ヘルメットと防寒着を着用して災対本部のテーブルの前に立ち、城山方面を指さして言葉を発する総務課長の澤舘さんに目をやっているようです。これより前に、中央棟玄関を入って行く姿が目撃されています。防寒着などを取りに隣接する裏庁舎に向かった可能性があります。

上席主査管理班長の三浦英人さんは午後3時過ぎ、城山の生涯学習課から城山公園トイレのシャッター開放を要請され、一時ためらいますが、久保・同班主事が判断を仰ぐと「鍵を届けてやってくれ」と指示します。

管理班主事の前川美知さんは午後3時10分過ぎ、室内に張り出された模造紙に災害対応の経過を記入していました。津波の少し前と思われる時間帯に、臨時職員の前野さんと裏庁舎北側の玄関から出て行く姿が見られています。

管理班主事の中村仁人さんは午後3時10分ごろ、大槌浄化センターの管理業者の携帯電話に自身の携帯から安否や被害状況を確認するために連絡しています。

城山に出発する前の小國槇也・同班主事もそのやり取りを聞いていました。

主幹兼工務班長の岩間久さんは、津波が庁舎に達した直後の時刻と思われる午後3時22分に妻に安否確認のメールを送信しました。久保・管理班主事によると、本震の後、工務班員らと打ち合わせをしているようでした。

工務班主査の三浦徳幸さんは短くても午後3時10～15分、裏庁舎北側の駐車場で、ポンプ場などの公共施設の点検に出動するために公用車の脇に立っていました。この間、カーラジオで得た情報を周囲に伝えたり、ほかの職員と会話したりしていました。

工務班主任技師の八幡力さんと同班技師の川端大佑さんは、同課に残り続けていなければ、駐車場で同班主査の三浦徳幸さんと合流し、出動した可能性があります。大町雨水ポンプ場の電気設備を保守する高木電気管理事務所代表の高木正基さんは午後3時5分ごろ、同課の固定電話が話し中だったため、八幡さんの携帯電話に連絡を入れた記憶がありますが不通でした。

工務班主事の佐藤拓也さんは災害対応に備え、事務職として津波襲来まで同課で待機していたとみられます。

臨時職員の小國奈穂子さんと押野千恵さんは午後3時ごろに一時、同課の部屋を出たか、午後3時15分前後に何らかの指示を受けて管理班主事の前川さんと共に裏庁舎を後にした可能性があります。

9 議会事務局

主任主査監査班長の前川正志さんは本震の後、すぐに西棟から本庁舎に向かい、災対本部の設営に従事。津波にのまれた後、中央棟北増築部分の東側と東棟北側に挟まれた一帯を流され、屋上に逃れた職員たちが懸命に救助の手を差し伸べますが、引き波にさらわれてしまいました。

第3章 被害はなぜ拡大したのか

町役場はなぜ、甚大な人的被害を出してしまったのでしょうか。今調査と並行して進めたご遺族からの意見聴取では、肉親が犠牲にならざるを得なかった理由を知りたいという声が続つて寄せられました。この章では、今調査で集められた証言を基に、専門家の知見も織り交ぜながら惨事の原因や背景を探り、当時の危機管理体制が抱えていた構造的な問題を浮き彫りにしました。

1 被害拡大の諸要因

町役場の被災を巡っては、主に次のような要因が重なり合い、不幸な結果を招いたと考えられます。

①今の上町にあった町役場は昭和28（1953）年に



津波が直撃し、おびただしい量のがれきが押し寄せた旧役場庁舎
=2011年3月17日撮影

火災で焼失した後、翌年に過去の津波浸水域である新町に再建された。

②役場庁舎は震災当時、築57年を経て著しく老朽化。職員間に大地震による倒壊の恐れが高まり、防潮堤を越える大津波の襲来を予測できないまま、災対本部を本来の庁舎内でなく庁舎前の戸外に急設した。

③本震発生後、多くの職員が当時の地域防災計画の規則や毎年の津波避難訓練の人員配置に従い、役場庁舎に集まったり、庁舎内で待機したりした。同計画では津波警報が発表されていても職員の参集先は実質的に災対本部のある町役場だった。

④当時の地域防災計画に、役場庁舎が被災して「使用に耐えないと見込まれたとき」は災対本部を城山の中央公民館に設置すると定められていたが、津波対応時などの具体的な移設基準が明記されていなかった。

⑤震災前年に全職員に配布された「大槌町職員用防災手帳」に、想定宮城県沖地震規模の津波災害の際、災対本部を中央公民館に設置するとの「地震津波災害シナリオ」が載っていたが、職員に周知徹底され

ていなかった。平成18(2006)年ごろに実施された、中央公民館に災対本部を設置する想定の実験の訓練も生かされなかった。

⑥ 災対本部周辺にいた複数の職員がラジオやワンセグ放送で津波到達などの情報を得ていたが、それらを組織的に集約、処理できる状況になく、早期避難に結びつかなかった。

2 庁舎の立地と老朽化の影響

複合した危険因子

要因①②は、災害時の町の司令塔である災対本部が津波の襲う恐れのある場所にむき出しに設置されてしまったという最も根源的な問題です。

災害時の避難対策に詳しい廣井悠・東大大学院准教授(都市防災)は「浸水域に庁舎が立地する上に耐震性が低いなどの複数のハザード(危険因子)を抱えると、非常に対応が難しくなるという一つの事例。あら

かじめ庁舎を移転するか、耐震補強するかのどちらかの対策は必要だったのだろう」と指摘します。

「ソフトには限界がある。ハードの性能がそれなりにないと、ソフトも生かされない」と述べ、庁舎の老朽化というハード面の不安定要素がソフトである災害対応の展開に悪影響を及ぼしたとの見方を示します。

耐震構造の施されていない老朽庁舎について、2日前の前震と当日の本震、相次ぐ余震に見舞われた職員たちが庁舎倒壊の恐怖に駆られたのは想像に難くなく、総務課長の澤館純一さんの「建物に戻るな。外に出ていろ」との叫びに象徴的です。外出先から午後3時ごろに町長室に駆け付けた赤崎仁一・議会事務局長は「(庁舎内は)危ないから下で(災対本部を)やると誰かに聞いて、外に出た」と思い起こします。余震が続き、午後3時前後の時点で庁舎前に災対本部を急ごしらえする雰囲気醸成されていたのは間違いありません。

「庁内に本部設置困難」

総務課で防災担当の主幹兼総務広聴班長だった平野

公三現町長は、本震直後に町長や副町長、災対本部の部長職を務める各課長が「集まって何かを話したという記憶はない」。午後3時前後に余震が続いた時間帯に「建物の中で（災対本部を運営するの）は無理だろうと、机を外に出すことになった。総務課長の指示だった」と証言します。

大津波警報が発表されていた当時の状況は災害対策基本法第60条に基づき、市町村長が「避難指示」を発令すべき基準を満たしていました。しかし、大槌町の災対本部は情報集約に手間取って指示を発令できず、防災行政無線でも「停電で放送は不可能」との推断なことから広報するに至りませんでした。一方、役場の放送設備を保守管理する佐々木電機本店（盛岡市）によれば、停電時には非常用電源が働いていたはずだといえます。

結局、同本部の指揮とは別に、テレビのニュースで同警報に気付いた当直の消防署員が午後2時56分過ぎと津波が押し寄せる直前の2回にわたって、防災行政無線の全町放送で高台への避難を促しました。

災対本部を構成する幹部職員や総務課員の多くが亡

くなってしまう、本部中枢での詳しいやり取りは明らかになっていません。副本部長の東梅政昭副町長や伊藤正治教育長、平野現町長も、具体的な方針を決める会議のようなものはなかったといえます。伊藤教育長は「それぞれが携帯電話などで情報収集し、会議の体はなしていなかった」。東梅副町長は災対本部をいち早く城山に移設することについて「消防団が（水門閉鎖などで）危険な方角に行ったり、役場のお客さんが残っていたりする中、災対本部の限られた人間だけ上に行ってしまうという思いもあった」と明かします。

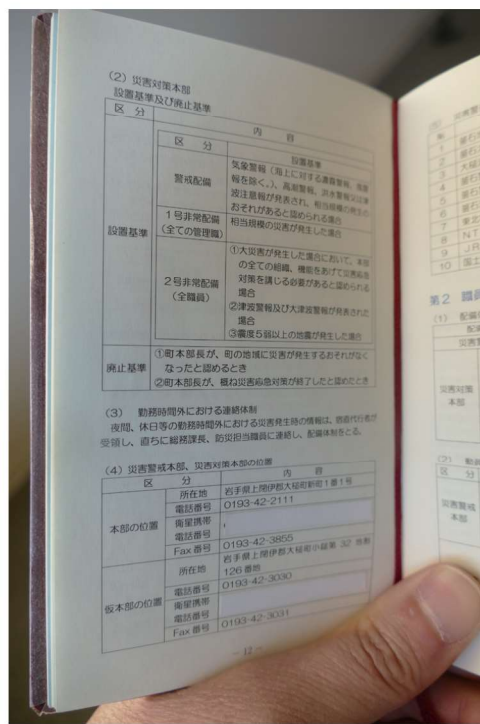
要因④に絡み、平野現町長の記憶では、庁舎前で災対本部を城山に移設する是非についての協議は特にありませんでした。一方で、平野正晃・国保年金班主事は総務課長の澤舘さんが本部移設を模索しているような雰囲気を感じ取っていました。津波直前、職員情報班主事の花石一さんや齊藤充さん、介護班主事の倉堀健さんが城山方面に移動を始めていたとの目撃証言は、平野主事の印象を補強するものといえます。

3 地域防災計画の盲点

職務で役場参集

要因③④の地域防災計画は平成22(2010)年度の改訂版を指しますが、新しく印刷した冊子は配布される前に当日の津波で流されてしまいました。幹部以外の一般職員が認識していた同計画は平成16(2004)年ごろの作成とみられますが、災对本部に関する取り決めは改訂前後で大幅な変更はありません。災对本部の位置は大槌町新町1番1号の大槌町役場。ただし、「役場庁舎が被災し、本部としての使用に耐えないとき」は仮設本部を大槌町小槌32-126の町中央公民館に設置することとしています。

改訂地域防災計画と、同改訂作業と並行して作成された職員用防災手帳では、大災害発生時や、津波警報・大津波警報が発表されたり、震度5弱以上の地震が発生したりした場合、「2号非常配備」で全職員が災对本部に参集する決まりになっていました。しかし、津波災害が発生したときの災对本部の位置については明



職員用防災手帳では大災害時に災对本部への参集が義務付けられていた

確な規定がなく、同非常配備でも庁舎が著しく被災していない限りは職員が町役場に集まらざるを得ない状況でした。実質上、本部移設の要件に津波災害そのものが想定されていなかったのです。

また、昭和三陸大津波(1933年)のあった3月3日早朝には毎年、町を挙げて津波避難訓練を実施していた、役場職員は定められた配置に従い、災对本部や各避難場所、避難路などに分散。地域整備課と水道事業所は「ライフライン関係課」として庁内待機や給水車の出動が命じられました。

津波が襲った3月11日も本震後、多くの職員が職務



震災当時の地域防災計画で庁舎被災時に仮設災対本部が置かれることになっていた中央公民館

上、役場を目指したり、持ち場の避難場所などに向かったりしました。結果的に犠牲職員40人のうち、福祉課地域包括支援センターや産業振興課農政班などの7人が用務先から役場に戻ったり、その途上にいたりして被災。避難誘導中に津波に巻き込まれたものの、かろうじて助かった職員も複数いました。

4 危機感と避難行動の間

10級津波想像できず

一方、複数の証言から、少なくとも職員が程度の差こそあれ、津波への危機感を持っていたのは確かです。にもかかわらず、それが即座の避難行動に結びつかなかったのはなぜでしょうか。

災害時の心理や行動に詳しく、『人はなぜ逃げおくれるのか』などの著書がある広瀬弘忠・東京女子大名誉教授（災害リスク学）は「一般的に、今までに経験したことのない大地震が起きた後では一定の時間、ショック症状のような、頭の中が真っ白になって判断ができない状況に陥りがちだ」と指摘します。「目の前に危険が迫っていても、急に気付かないことがある。（22万人以上が犠牲になった）スマトラ沖地震（2004年）でも、津波の前に立って呆然と眺めている人がたくさんいた」

東梅副町長は、ラジオ放送を聞いた職員の1人が庁舎前で「（岩手県に）3級の津波が来るそうです」と

声を張り上げたのを覚えています。NHKのテレビとラジオの同時放送は午後2時50分から3時7分にかけて繰り返し、気象庁が2時49分に発表した大津波警報と各地の津波予想高さを読み上げていました。

広瀬名誉教授は「日常の中で10メートル級の津波が来るということは想像がつかない。3メートルという予想だったら、今の防潮堤で十分防げると考えてしまう。心理的には、とにかく自分を守りたいから、なるべく危険を感じたくない。とんでもないことが起こるとは想定したくないし、できない」と推察します。

東梅副町長は、津波は当時町を囲んでいた海面からの高さ6・4メートルの防潮堤を「越えてこないと思った。ただ、(津波が)来てみなければ分からないので、心配で、どうしようかとずっと様子を見ていた」と振り返り、「震災以前に来た津波は気象庁の予想高さを大幅に下回るものばかりで、3メートルといっても実際は1メートルぐらいだろうと思って逃げ遅れた人は多いはずだ」と悔しがります。

一般職員たちと災对本部の周りにいた菊池信也・財務班主事も「体よく言えば(本部からの)指示を待つ

ていたが、非日常的なことだし、先が見えない焦りや不安な気持ちにとらわれていた。津波よりも(地震で)庁舎が壊れるのが怖かった」と、庁舎前に漂っていた雰囲気表現します。

津波対応の余裕なかった？

地震の後、しばらくは「ショック症状」や「様子見」、不安な状況が続いたものの、どこかに総務課長の澤館さんが高台退避を決断するに至る転換点があったと仮定したらどうでしょうか。

災害時の情報伝達などを研究する関谷直也・東大大学院准教授(災害情報論)は、庁舎前で推定午後3時15分に撮影された写真⑧⑨(35ページ)⑩(36ページ)で、澤館さんが携帯電話の画面に目を凝らしているのに注目します。

この1分前に気象庁が東北3県の津波予想高さについて、岩手、福島両県は当初の3メートルから6メートル、宮城県は6メートルから10メートルに引き上げたこともあり、澤館さんは何らかの情報を携帯電話から得ようとしていたと思わ

れます。

NHKのテレビとラジオの同時放送は午後3時14分から釜石港に押し寄せる津波を報じ、3県で引き上げられた津波予想高さについて音声による読み上げはなかったもののテレビではテロップが映し出されていました(※38頁写真①参照)。写真⑩(36頁)には企画財政課長の木村圭治さんの指示でカーラジオを流したままにしていたと思われる公用車が写り込んでおり、携帯電話のワンセグ放送を見ていた職員も周囲にいました。

津波が庁舎を直撃したのは澤舘さんが写真に写ってから6分後です。関谷准教授は①午後3時6分と同8分に起きた岩手県沖が震源の大きな余震②津波予想高さの引き上げ③釜石に津波が襲来したとの報道——を経て、災対本部周辺で津波への危機感が現実的になったとみます。

「それらの情報を確認するので手いっぱいだったのでは。地震から津波までに30分以上あったのに何をやっていたんだと思われがちだが、午後3時15分の辺りで(澤舘さんが)『これはまずい』と気付き、それから5、6分で津波が来てしまった。単純に(退避を

検討する)時間がなかったという可能性もあるのではないか」

推定午後2時58分撮影の写真⑥(27頁)と同3時15分撮影の写真⑦(34頁)の間に17分の開きがあることについては、「物資搬出など何らかの対応をしていたか、余震の中で身を守るのに精いっぱいだったかのどちらかで、記録をするどころではなかったのだろう」と推測します。

関谷准教授が東日本大震災第三者検証委員会の委員を務めた宮城県名取市でも、午後3時14分に同県の津波予想高さが10以上に引き上げられたことや釜石の津波報道を契機に、避難行動が促進されたとの証言が複数あったといえます。

津波より庁舎倒壊恐れ

関谷准教授は「時間があつたはずとみるか、なかったとみるかで見方は大きく異なってくると思う。津波対応に充てる時間は限られていた。あれだけ激しい地震があつた後に、危機感がなかったはずはない。しか

し、その注意が津波ではなく、耐震化されていない庁舎が倒壊する恐れの方にまずは向いてしまった」と述べ、発災当初は津波の脅威はそれほど大きくなく、庁舎倒壊の危機感が支配的だった可能性を示唆します。

一方、県の災害モバイルメール「リアルタイム防災情報」は発災から午後3時15分までに、大津波警報の発表や「3級程度以上」の津波予想高さ、本震の各地の震度などの情報を3件配信していましたが、その中に津波予想高さが引き上げられた事実は含まれていませんでした。

聞き取りによれば、ワンセグ放送などで釜石を含む岩手県沿岸への津波到達を知った記憶のある庁舎前の職員は14人中4人いました。そばにいた澤舘さんが津波予想高さの引き上げや報道内容をどの程度把握していたかははっきりしませんが、複数の異なる情報を得て確認しようとしていた可能性は十分あります。

写真を撮っていた三浦義章・総務広聴班主事によると、ワンセグ放送や携帯電話を見ていた複数の職員が津波到達や大津波警報などの情報を口にしていました。が、集約や処理がままならず、「町としての対応がで

きていなかった」といいます（要因⑥）。

津波が直撃する1分前の写真⑬⑭（44頁）では、幹部職員や総務課員が災対本部で記録作業を続けており、ぎりぎりまで庁舎前で対応していたことが分かります。澤舘さんが退避の号令を発したのはその後の1分間のどこかということになります。この時間帯には高台避難を呼び掛ける消防署の防災行政無線も放送されていました。

5 避難の心理と防災教育

大声出せなかった職員

職員たちは烏合の衆で集まっていたわけではなく、その場で最善を尽くしていたはずだと話すのは、災害に遭った人の心理に詳しい金井昌信・群馬大大学院教授（災害社会工学）です。

「結果的に、ここに津波が来るということを誰かが大きな声で言えなかったのでは。声を発する人が一人

でもいるかどうかで犠牲者の多寡が決まってしまう」と指摘し、庁舎前にとどまった災対本部の雰囲気も早期に覆せなかったことを惨事の要因の一つに挙げます。

今回の調査では、犠牲職員のうち少なくとも8人に津波への危機感をおわせる言動があったことが分かっています。とりわけ、福祉課長の関郁夫さんは課員らに強い調子で避難を促し、在室した約10人が近隣住民を助けながら城山に上がりました。その後、関さんは車での外出を挟んで午後3時10分過ぎに災対本部に合流した可能性があります。

金井教授は、関さんの意思が「部下にはよく伝わったけれども、立場が同じか、町長や副町長ら上の人にはうまく浸透しなかったのではないかと推測します。いずれにせよ、関さんが災対本部に滞在した時間はかなり短かったと思われる。

大槌町に隣接する山田町の町立船越小学校では、地震の後、児童や教職員約150人がマニュアル通りに校庭に避難しましたが、水平線が盛り上がって見えるなど海の異変に気付いた地元出身の男性校務員の進言

に従って裏山に逃げ、命拾いしました。金井教授が防災教育のプログラム作成に携わった釜石市でも、校庭に集まったままの児童たちに大人が避難を強いて助かった同様の事例があったといえます。大槌町の福祉課の動きを含め、いずれも不完全なマニュアルがもたらした危機を現場の機転で切り抜け、「避難スイッチ」が入った象徴的な出来事だといえます。

金井教授は、危険が間近に迫っている場合、大声で騒ぐ「率先避難者」をあらかじめ地域や組織で決めておき、大勢の人がいる中で他者と歩調を合わせようとする心理的特性「集団行動性バイアス」を利用して逃げるのが有効だと説きます。参集義務に従って職員がそれぞれの任務に向き合っていた災対本部周辺では、一定の規律の下で一人だけ声を上げるのは難しく、同バイアスを喚起する条件が整っていなかったとみられます。課員の大半が犠牲になった地域整備課も同様の状況だったのではないのでしょうか。

広瀬・東京女子大名誉教授は「避難行動は集団行動であり、一人では逃げられない。役場という組織、特にみんなが外に出て、災対本部を設置しようとしてい

る中で、個人が危険だと思ったからといって避難することは心理的に相当ハードルが高い」として、職員が一丸となって住民の命を守らねばならないというプレッシャーの下ではそうした傾向が顕著になるといいます。

一方、津波襲来まで庁舎前にとどまり続けた森田英之・課税班主任は「職務上、地域を預かる公務員として、住民より先に避難するという考え自体がなかった」と振り返ります。

異変に気付く力を

廣井・東大大学院准教授は、災害マニュアルをきちんと作り込んで習熟する必要性を述べる一方、次のように防災教育の大切さを強調します。

「災害はマニュアル通りには絶対に発生しない。不測の事態、例えば地震の後に海の様子がおかしいといったことに気付くりテラシー（物事を分析、判断する能力）や学力を防災教育の中で身に着けるべきだ。災害は自然・物理現象。西日本豪雨（2018年）では、

斜面から石がころころ落ちるのを見て、危険を察して避難した自主防災組織の人がいた。避難にしろ、災害対応にしろ、異常事態をどれくらい把握、認知できるかが鍵で、津波のような地域特有の災害について小中学校で学ぶことは重要だ」

災対本部周辺では、町長の加藤宏暉さんが早い段階で井戸水ポンプから水が噴き出す現象を気に留めたり、潮位計の数値を確認したりしていましたが、残念ながら避難の動機にはなりません。大きな地震の後に井戸水や水路を観察することは沿岸に暮らす住民の習慣です。しかし、当時、発生から51年を経たチリ地震津波（1960年）の記憶の風化や、前年のチリ地震津波で大津波警報が出ながらも被害が限定的だったこと、2日前に大槌町で震度4を観測した地震が津波注意報レベルだったことなどが重なり、慣れや油断を生んでいたかもしれません。

6 防災担当者の責任と反省

町長への説明不足であった

要因⑥に関連して、広瀬名誉教授は、情報収集に腐心する災対本部の現場に「それぞれの動きがバラバラで、津波災害に対する統合された指揮系統がないように見える。コミュニケーションの欠如があったのでは」と指摘します。

防災行政担当の総務課主幹として災対本部の中枢にいた平野現町長は「情報を吸い上げて、町長や副町長に提言するのは総務課長や私の役目だったが、そういう流れがちちんと組織、本部としてできていなかった」と、自らの責任を認めます。「様々な情報が上がってこない限りは、(町長が)避難指示を出すという判断もできない」と述べ、指揮系統トップの加藤町長に部下としてうまく働き掛けられなかったことを今も後悔しています。

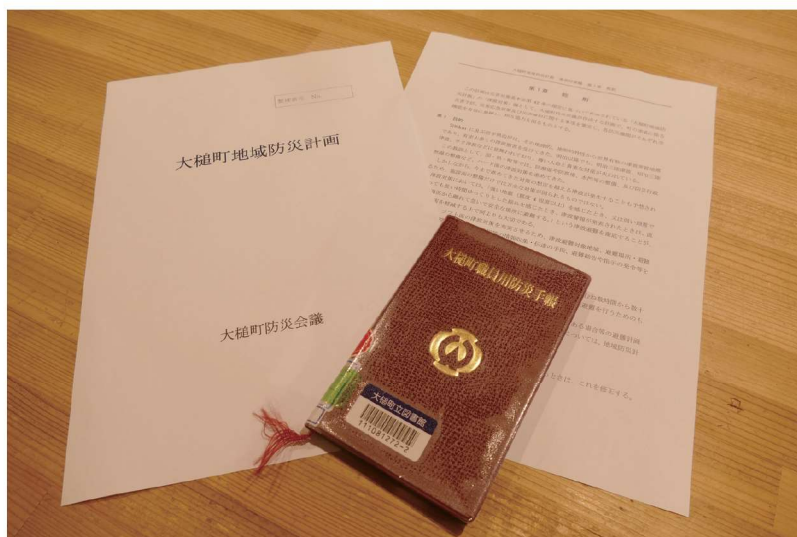
さらに、加藤町長に対して非常時の動きをどうするかという「レクチャー(説明)が日ごろから足りなかつ

た」と反省を込め、こう自戒します。

「長い役場勤めの中で、何度か津波警報が出たことはあっても、大津波の経験がなかった。それでも全国的には大地震や北海道奥尻島の津波災害はあったわけで、そのことを自分たちに引き当てて考え、危機意識を持つべきだった。町全体として、長年、組織的にしっかりと培ってこなかったことが大きな被害を招いてしまった」

7 生かされなかつた防災手帳

要因⑤の職員用防災手帳は平成22(2010年)年、当時改訂作業中だった地域防災計画の内容をコンパクトにまとめて携行できるようにと、澤館さんの前任の総務課長で前町長の碓川豊さんの発案で作製されました。「平成22年3月」発行の記載がありますが、全職員に配布された時期は、町長選出馬のために同年12月上旬に退職した碓川さんの記憶では11月末ごろでした。碓川さんは退職に先立つ防災会議の席上、幹部職



職員用防災手帳と、基となった平成22年度改定の町地域防災計画(部分)

員に対して手帳の内容を一般職員に周知するよう要請したといえます。

同手帳で宮城県沖連動地震規模の津波災害に備えた町の動きを1カ月後までの時系列で示した一覧表「地震災害シナリオ」は、平野現町長が中心になってまとめました。この中で発災から1時間の推移について、

職員の非常参集と災对本部設置の後に「職員も避難、本部を中央公民館に設置」と記し、城山にある中央公民館への災对本部移設を想定しています。

これは平成16(2004)年に県が発表した「岩手県地震・津波シミュレーション及び被害想定調査に関する報告書」に掲載の「災害シナリオ」を踏襲し、そこにある大船渡・釜石地域の「沿岸南部」の項で「市町村職員も避難、本部を安全な場所に設置」とあるのを、大槌町の地理に合わせて単純に書き換えたものです。

今回聞き取りに応じた当時の職員四十数人の大半が、手帳を受け取ったことは覚えていてもシナリオの存在をよく知りませんでした。日ごろから中身を精読したり、研修会を開いたりする機会もなく、地域防災計画のエキスを収めた手帳は実質上「マニュアル化」していなかったと言わざるを得ません。2日前の前震を経験して改めて手帳を読み込んだという澤館和彦・財務班長は、その時にシナリオの記述に気付き、当日は避難誘導先の大ケ口から山道を通ってまっすぐ中央公民館に向かっています。

津波に備えて災対本部を中央公民館に移設することを想定した職員用防災手帳の「地震災害シナリオ」

シナリオ血肉化せず

平野現町長は「手帳を作ること自体が目的になっ
てしまいい、プロセスが重視されなかった。県の資料から
引っ張ってきたシナリオにしても、本当に大槌町の実
情に合っているのかどうかという議論が尽くされない

ままで、血肉になっていなかった」と反省を述べます。
金井・群馬大大学院教授は、総務課内の一つの班が
防災行政を担っていた震災当時の町の状況に同情的で
す。「規模が小さい自治体になればなるほど、ほかの
業務を抱えている部署が防災も受け持つ形になりが
ち。そこが音頭を取って、全庁体制で（諸施策を）周
知徹底するのは難しかったのだろう」。そうした弊害
を防ぐために、権限の強い防災専門職員を任命し、5
年や10年などの一定期間、異動なしに担当部署を運営
し続ける仕組みが必要だと金井教授は提言します。
平成18（2006）年ごろには、津波襲来を想定して
城山の中央公民館に災対本部を設置する訓練が抜き打
ちで実施されたこともありましたが。当時も公民館勤務
だった鎌田精造・社会教育文化班長によると、早朝に
電話連絡で職員を集め、大会議室に災対本部を構えま
した。震災直後から城山公園体育館や中央公民館で避
難者の対応に当たった鎌田班長は、当日もすぐに大会
議室が本部になると思っていたといいます。

「進展望めず高台退避」

総務課長の澤舘さんが高台退避を決断した根拠が、津波が予想されるときに災対本部を城山に設置するとのシナリオか、地域防災計画の「役場庁舎が使用に耐えないとき」との記述か、あるいはそのどちらでもないのか。また、沿岸への津波到達の報道や、津波直前に流れた防災行政無線が直接のきっかけになったのか。今や真相を探ることは極めて困難です。ただ、澤舘さんが「もうやめ、やめ」「ここにいてもどうにもなんねえ」と叫んだとされることから、直前まで庁舎前で災対本部を維持しようと努めたものの、何らかの窮状に直面し、撤退せざるを得なかった諦めや焦りのような心境が透けて見えます。

このままでは災対本部の機能を果たせず、事態の進展は望めない――。そう判断したとたん、津波は襲いました。

平野現町長は津波の直前に澤舘さんと交わした会話について「鮮明な記憶ではない」としながら、「情報も入ってこないし、電話も使えないような状況だった

ので、上に逃げるということもありかなという趣旨だった」と回想します。

8 悲劇を繰り返さないために

対面の安否確認避けて

犠牲職員の中には発災後、家族や親戚、あるいは家族に準ずるペットの安否が気になり、確認しに行った例がありました。そのうち3人は役場に戻ろうとする途中などに被災したとみられます。廣井・東大大学院准教授は「家族を心配して家に帰ったり、迎えに行ったりするのは人間として当たり前の行動で、簡単には止められない」といいます。

対面して安否確認をしなくても済む環境を作ることが大切で、例えば、親が不在でも子どもは周囲の大人と避難したり、避難場所を決めておいて後で合流したりするなど「家族が互いを信じて、自分の命を守るために全力を尽くすことが求められる」。

廣井准教授は、職場での啓発活動として、あらかじめ家族間で災害時の取り決めをしておくよう勧めたり、緊急対応などで家に戻れない可能性を職員家族に知ってもらったりすることも必要だと話します。

町は東日本大震災の反省と教訓から、平成25(2013)年度以降の改訂地域防災計画で、津波警報か大津波警報が発表されれば直ちに災対本部を城山の中央公民館に設置することとし、各避難場所や避難経路への職員配置も移動中の被災を防ぐために廃止しました。法令に基づく「避難指示」の発令基準については、津波警報以上から津波注意報以上のレベルに引き下げました。

不備認めて対策を

津波で逃げ込んだ多くの住民が犠牲になった釜石市鵜住居町の鵜住居地区防災センターの被害要因の調査委員長を務めた齋藤徳美・岩手大名誉教授(地域防災学)は、「住民の命を守るのが行政の責務なら、真っ先に避難指示を出して、自分たちも逃げねばならな

かった」と当時の対応に苦言を呈します。「津波災害が繰り返されてきた大槌で、大地震の後にすぐ避難するという危機意識が培われなかった原因を考えてほしい」と注文を付け、深い反省から生まれる検証を基にした対策を求めています。

同センターの事例では、建物が津波時の緊急避難場所でなかったにもかかわらず避難訓練会場になってきたいきさつが誤解を生むなどして被害が拡大した背景が浮き彫りになり、調査委は平成26(2014)年の最終報告書で釜石市に対し、住民避難に特化した避難訓練の実施や行政担当者の防災意識の向上などを提言しました。

齋藤名誉教授は「誰かを責めるというのではなく、町は危機管理の体制に不備があったことを率直に認め、同じ轍を踏まないように住民と手を携えていくことが重要だ」と強調します。

危機管理体制にもろさ

惨事の直接的な要因は、過去の浸水域に立地する役

場庁舎に規則に従って職員が集まり、防潮堤を越える津波の襲来を予測できないまま災対本部を構え続けたことです。そして、即座の避難を阻んだ背景には、大規模な津波災害を想定し切れなかった不完全な地域防災計画など当時の危機管理体制の脆弱ぜいじやくさがあったといえます。

役場職員は基本的に職制から逸脱した行動を取ることは難しく、少なくとも職員が抱いていた津波への危機感を表明する機会も失われた上に、いくつもの要因が絡み合った結果、あのような惨事を招いたのではないのでしょうか。人がつくる制度や仕組みはいつの時代も完璧ではなく、自ずと限界があります。過去の反省と教訓から真摯に学び、よりよいものにつくり変えて、災害時の被害を最小限に食い止める不断の努力や営みが求められます。

震災はまる10年が経過しても「現在進行形」で続いているといえ、物理的な復興の遅れもさることながら、傷ついた心は容易に癒えるものではありません。回復の度合いも人によってさまざまです。心身のバランスを崩し、学校や職場に通えなくなるなど社会生活に支

障をきたす人は今も少なくありません。

「自分だけ生き残ってしまったて申し訳ない」。聞き取りに応じた役場職員はもちろん、遺族をはじめ多くの町民がいわゆるサバイバーズ・ギルト、生存者の罪悪感に苦しみながら生きています。広瀬・東京女子大名誉教授は「生還した人はどうしても自らの悲しみを罪悪感に帰属させてしまう」として、悲しみそのものを罪悪感から切り離してケアする作業が大切だと説きます。町民の心のケアは今後も大きな課題です。

今、私たちにできるのは、大槌町の出来事を広くいつまでも語り継ぎ、二度と同じような悲劇を繰り返さないことです。志半ばで逝かざるを得なかった役場職員や町民の皆さんの思いに応えるためにも。

第4章 仲間が語る「あの人のこと」

亡くなった役場職員の皆さんはそれぞれ、単に数字に表れた犠牲者40人のうちの1人ではなく、当然のことながら、顔があり、名前があり、それまで歩んできた人生がありました。同僚が、先輩が、部下が、友人が、追悼の思いを込め、皆さんとの楽しかった思い出を振り返ってくれました。ここでは37人の面影をしのびました。

※かっこ内の氏名は語ってくれた人（順不同・敬称略）

加藤宏暉さんのこと

平成20（2008）年の釜石市との合併協議では大変苦労されたと思います。総務課長などを歴任したたき上げの役場の人で、部下の意見は大事に聞いていました。町内会で一緒に活動したり、仕事帰りには行きつけの居酒屋「勝之助」で一杯やったりもしました。本当に温厚な人でした。

（伊藤正治）

町長専用の公用車を購入する際、最初に勧められた車種を分不相応だからと断り、結局、色も無難な大衆車を選んだことがありました。

（伊藤幸人）

39歳で私が県庁に派遣され、当時副町長だった加藤さんと一緒に、出張で農林水産部長にあいさつに行った際、背広の上を着ていなかったのを見とがめて、「TPOをわきまえなさい」と指導していただきました。このことを肝に銘じ、以後、身なりをきちんと整

えるようになりました。

（平野公三）

いつもにこやかに、若手の職員にも優しく接していただきました。ジャズ喫茶「クイン」に一人でみえて、とてもリラックスした雰囲気です。マスターと話をされていた様子が今でも印象に残っています。

（八幡まゆみ）

澤館純一さんのこと

昭和50年代の台風被害で町内の橋が流された時は農林課に所属しており、同学年・同期の故木村圭治さんと名コンビで処理に当たっていました。大槌町畜産振興公社の業務も行い、地域では大ケ口自治会の事務局に従事。仕事と地域活動の両方を積極的に支えてくれる存在でした。

（越田由美子）

礼儀正しく真面目で、仕事の時は常にワイシャツを

腕まくり。それだけ役場の仕事に誠意と情熱を持って臨まれる方でした。震災の年の1月、澤館総務課長に代わってから、役場の雰囲気が一瞬にして明るく前向きになったことを今でも思い出します。剣道の全国大会上位入賞の腕前が示す通り、性格はまさに「武士」。公務員とは、仕事とは、リーダーとは……。背中で語る姿と、愛称の「サワジュンさん」……。一生忘れることはありません。

(森田英之)

部下思いで、福祉課長の時、年賀状の返事に「いつもがんばってくれてありがとう。頭が下がる思いです」と書いてくださったことが懐かしいです。福祉課にはそういう人の心が分かる方が長として来られるんだなと思いました。保育士さんからの信頼も厚かったです。

(中野久実子)

物事の白黒をはっきりさせる方で、尊敬できました。剣道の有段者でもあり、仕事においても真剣で

一本を取りに行くような強いイメージがあります。

(平野公三)

藤原宏一郎さんのこと

公私にわたって「できる人」という印象です。町長秘書の仕事を全部仕切りつつ、ほかの業務もきっちりこなしていました。コンピューター関係に詳しく、美的なセンスがあって広報誌づくりにも長けているなど、オールマイティーで何にでも興味を持ち、処理能力が半端じゃない人でした。

(三浦義章)

私が大槌保育所の保育士だった時に初めて会いました。3歳で入ってきた時から「はい、ふじわらこういちろうです。よろしくおねがいします」ってきちんとあいさつできました。いつも穏やかで落ち着いていて、利口な子でしたね、コウちゃん(藤原さん)は本当に。

(中野久実子)

高校からの同級生です。コウちゃんはいつも「俺の辞書に『忙しい』の文字はない」と話していて、どんなに仕事为重なっている、嫌な顔一つせず、みんなの相談や要望に応え、どんなことにも対応できる万能な人でした。仕事のこと、個人的なこと、男女の関係なく、何でも話せる大親友だと思っています。

(田中彰恵)

職員有志で勉強会をした時、「私たちは公務員のプロであるべき」という話をしていたことが今でも強く心に残っています。それを人に押し付けるのではなく、難しい問題も自分の中でかみ砕き、周りの職員に解決方法を還元してくれる頼りになる方でした。

(八幡まゆみ)

小笠原広樹さんのこと

私が入庁して間もなく、広報誌の担当として「新山高原まつり」の取材で初めてカメラを持たされた時、撮影の方法を一から教えてくれました。その時に広樹

さんを被写体にした写真があるんですが、いつもと違うきりつと男前の表情。それが遺影に使われたんです。俺のやり方を見て仕事を覚えろという指導のタイプでしたが、何かあれば必ずフォローしてくれました。自分の仕事より仲間の相談に乗ることを優先させていました。

(三浦義章)

いつもにこにこしていて職員に人気がありました。カラオケでは先輩の藤原宏一郎のマイクをぱっと取って歌いだすことも。広報誌編集の傍ら、総務全般の仕事をよくがんばってやってくれました。

(平野公三)

高校の時に同じクラスで、既にひょうきん者だった彼と同じ大学に進みました。就職後も彼が広報の仕事で忙しくなる月末を除き、ほぼ毎月1回は飲み歩いていました。付き合いが長く、特に大学時代は色々やんちゃもしました。向こうはどう思っていたか分かりませんが、私の中では親友と言える何でも話せる特別な

存在でした。

(平野圭)

町のイベントの時、広報の写真を撮りに来てくれました。特に秋は休みごとにイベントがあり大変だったと思います、いつも嫌な顔をせず記事の依頼を引き受けてくれました。

(八幡まゆみ)

佐藤一葉さんのこと

やることはきっちりやるタイプ。上役にも後輩にも、ぶれずにきちんと筋を通す人でした。

(三浦義章)

一葉さんは四つ年上で、明るくていつも話題が絶えませんでした。テレビやお笑いのことなど、たわいのない会話を楽しみました。インドが好きで、いつか行きたいと言っていました。寒い日にエスニック調のストールをまもっていて、インド風で素敵だったのを覚

えています。家族思いで、弟さんやお母さんのことをよく話していました。震災の年の元旦に「また集まって飲めたらいいね」とメールを交わしたのが最後になってしまいました。

(黒澤智美)

口数は少ないが、物事をきちんと判断して仕事していました。どんな流れだったか忘れてしまいました。震災の前の年末にジャズのベスト盤を貸してくれたことがあります。

(平野公三)

とてもおしゃやかな方でした。婦人部か何かでご実家のお好み焼き屋さんで懇親会をした時、てきぱきとお母さんのお手伝いをしていたことが思い出されます。

(八幡まゆみ)

齊藤充さんのこと

中学の同級生で役場でも一緒。充の家が仲間のたま

り場になっていました。そばにいて当たり前で、いなくなつて初めて寂しさに気付きました。火葬が終わつて仏壇の前に座つた時はいろんなことを思い出して、本当に泣きました。

(金野匠)

ゲームやアニメの世界に精通していました。アニメの各ジャンルのマニアも、齊藤さんの豊富な知識にはかないませんでした。キャラクターのフィギュアを自作し、CGで設計図を作るところから始めていました。最初はゴジラや恐竜でしたが、そのうちロボット系、涼宮ハルヒなどの少女系アニメへと進化していききました。少女系は髪の毛の質感を出すのが難しいなどと言っていましたね。

(三浦義章)

町公式サイトイベントのページやバナーの作り方を、アナログな私にも分かるように丁寧に教えてくれました。動画を載せようと私が撮影したのですが、手ぶれがひどくて、「これはちょっと……」と言いく

そうに苦笑いされて、こちらの方が笑ってしまった思い出があります。

(八幡まゆみ)

パソコンに強く、緊急経済対策の一施策で実施された定額給付金に関する町民への通知プログラムも「簡単ですよ」と言つて、すぐ作ってくれました。気負いなく、淡々と仕事をする男でした。

(平野公三)

花石一さんのこと

いつも朝早く出勤して、デスクの上を掃除してから仕事を始め、勤務中はずっと集中していました。課で飲み会や誘いがあつても極力応じず、お昼も弁当を注文せずに家から持ってきたおにぎりを食べていました。理由を尋ねると、欲しい車があるので節約しているといい、ついに震災前年の暮れにその車を購入しました。筋トレも一生懸命やっていて、自分を律し、設定した目標に向かって一途に突き進むところがありま

したね。

昔のロボット系のアニメ、特に機動戦士ガンダムが好きでした。震災前年の仕事納めの日には花石さんと故齊藤充さん、故中村仁人さん、私の4人で、花巻から夜行バスに乗って東京ビックサイトのコミックマーケットに行きました。その足で、花石さんのリクエストで当時静岡市に展示されていた実物大のガンダムの立像も見に行っただです。

(三浦義章)

新車を買ったというので、栄町の家まで見に行っただことがあります。大きいものが好きな私に、静岡まで行って撮ったという実物大の機動戦士ガンダムの写真を見せてくれました。すごく感動したことを覚えています。

(平野公三)

木村圭治さんのこと

硬軟のメリハリをつけて仕事をする人でした。役場

のサッカーチームに所属していて、試合に出るのが好きでした。

(伊藤幸人)

いつも笑顔を絶やさず、同僚、部下に対しても優しく丁寧な言葉遣いで対応してくれました。他方、県庁の人とやり合うなど、気骨もありました。

(伊藤正治)

誰よりも早く出勤していて、事務室にコーヒーのいい匂いを漂わせていました。サッカーが大好きで、1998年のワールドカップフランス大会では弾丸ツアーで観戦してきたと、少しはにかみながら話していました。後輩への言葉遣いも丁寧でした。

(平野公三)

昭和50年代に農林課に所属し、設計も図面引きもほとんどが手作業だった当時、宮古市から通勤して、がんばって残業もしていました。その後、赤浜に住居を構えました。故澤館純一さんとは名コンビで、頼りが

いのある人でした。

(越田由美子)

お昼休みや仕事終わりに、宿直室でよく囲碁をされていました。仕事でも囲碁でも考えている時の真剣な顔が印象に残っています。

(八幡まゆみ)

鈴木有香里さんのこと

仕事熱心で面倒見のいい、真面目な人でした。仕事ではいつも笑顔を絶やさず、個性と創造性に満ちあふれていました。職員組合のスノーボード合宿では、頂上から何度転んでも諦めずに立ち上がって最後まで滑り切り、一緒に喜んだことを思い出します。

(藤原英志)

大槌中学、釜石南高校（現釜石高校）で同級生でした。同じ課になったことはありませんでしたが、やはり同級生の故小笠原広樹さんと3人でよく仕事帰りに

飲みに行きました。仕事の悩みからプライベートなことまで何でも隠し事なく語らい、励まし合う仲でした。真面目で夜遅くまで仕事をすることも多く、先輩からも頼りにされていました。

(阿部静子)

おっとりとした雰囲気癒やされました。話をしていると、周りをよく見ていて的確に意見を言っているなど感じることもあり、芯の強い方だったのでないかと思えます。

(八幡まゆみ)

祝田眞悟さんのこと

おとなしくて、優しい方でした。お店で一人、お酒をたしなむのも好きだったようです。

(越田宜弘)

物静かな人で、慎重派だったと思います。私が入庁した頃は農業委員会に勤務し、こつこつと仕事をする

タイプでした。写真を撮ることが趣味で、岩手日報の写真コンテストで受賞したこともあります。

(越田由美子)

物静かな印象でしたが、映画が好きでレンタル店で新作を借りた話などを楽しそうにされていました。

(八幡まゆみ)

私が入庁時に企画財政課で一緒にしました。真面目で物静かでしたが、毎日、小さい湯飲みでミルクと砂糖を入れたコーヒーを飲まれるなど、かわいらしい一面がありました。訛りが結構あり、仕事中に真顔で「トークショーに行ってくる」と定期的に出て行かれるので不思議だったのですが、登記所（法務局）のことでどど気が付くには時間がかかりました。

(佐藤明)

上野芳子さんのこと

大胆なところもある反面、繊細でした。勉強が好き

で、字もきれい。毛筆でした。ためた手紙をくれたこともありました。彼女といると、いつもお腹が痛くなるくらい笑い合ったことが思い出されます。

(佐々木直美)

私が好きなのドラマがあり、その話を覚えていたらしく、再放送された全話を録画してプレゼントしてくれました。マニキュアが大好きで、コレクションを見せてもらったことがあります。私が退職する時にもマニキュアをプレゼントしてくれました、今でも大事に使っています。面白くて、優しく、賢くて、大好きな後輩です。

(田中彰恵)

公私ともに仲良くしてもらいました。震災のあった3月の末に私の趣味のライブに行くことになっていて、良い席のチケットが届いたことを喜んでくれていました。寂しがり屋の一面もありましたが、いつも周りのことを気遣い、親しいのやさしい方でした。

(八幡まゆみ)

佐々木庸介さんのこと

税務会計課の前は福祉課にいて、保育所や児童館の再編の際に尽力してくれました。

(越田由美子)

よく冗談を言っていました。自分でコーヒーを入れて、カップを手に立ちながら飲んでいた姿が忘れられません。

(中野久実子)

仕事で困り事があって相談すると、必ず助けてくださいました。福祉課の時は夜間の緊急対応などもあり、みんなで夜明かしをしたことなどが思い出されます。居酒屋の「番屋」が行きつけで、お酒やご飯もたくさんごちそうになりました。みんなから慕われた方でした。

(八幡まゆみ)

ユーモアがあり、周りにはいつも笑顔が絶えませ

んでした。仕事の面では信頼できる上司で、相談するの的確なアドバイスをしていたり、様々な調整をしていたりしました。公私ともにお世話になり、毎年秋になると山へ連れて行ってもらっていました。庸介さんがいなければ、今の自分はありません。

(平野正晃)

佐々賢一さんのこと

剣道の先生をやっていて、うちの息子も教えてもらいました。職場を離れると飲み友達で、居酒屋の「熊ちゃん」や「ながいや」によく一緒に行ったり飲むと陽気だけど、普段は礼儀正しくて几帳面でした。私が中央公民館の災害対策本部に詰めていた時、奥さんから佐々さんの居場所を尋ねられたのに、よく分からなくてきちんと答えられないことがありました。申し訳なかったなあ。

(赤崎仁一)

一つ一つ真面目に仕事をクリアしていく先輩でした。懇親会の席では、陽気に顔を赤らめて、楽しそうにカラオケを歌っていました。

(平野公三)

どんなに仕事が忙しいときも、やさしい笑顔で子どもたちに剣道を教え、試合や稽古での子どもたちの成長をとて喜んでいたことが印象に残っています。自分を律し、人に優しい方でした。

(八幡まゆみ)

私が役場へ入庁した時の最初の係長でした。いつも優しく丁寧に仕事の基礎を教えてくださいました。仕事の後は「ながいや」、「大御所」、「食道園」という定番のコースで、よく飲みにも連れて行ってもらいました。20年も前のことですが、ついきのうのようです。本当にお世話になりました。

(小國晃也)

金崎健悦さんのこと

私より二つ年上の先輩で、中学の陸上部に所属していました。足が速く、私自身は野球部でしたが、駆り出されて一緒にリレーに出たことがあります。お酒を飲んで興が乗ると、チャグチャグ馬コを歌いながら割り箸を使って踊りだすこともあって、とても楽しい先輩でした。

(平野公三)

役場の窓口で来客対応に困っていると、必ず出てきてくれて一緒に話を聞いてくださいました。退職者を送る会や職場の懇親会の時の芸達者な姿も忘れられません。

(八幡まゆみ)

私が役場に入庁した時、初めて配属された係の係長でした。温和な人柄で、一つ一つ丁寧に指導していただきました。右も左も分からない私に、仕事の参考となるからと書籍を買っていただいたのを覚え

ています。

(平野正晃)

加藤国雄さんのこと

仕事を離れたところだと、町青年団体連絡協議会(町青協)で熱心に演劇をしていました。今の「おおつちバラエティーショー」の前身みたいな感じでした。

(越田由美子)

何度か演劇を見に行きました。役場では物静かな加藤さんがすごく大きな声を出していて、意外な一面を見る思いでした。

(金野匠)

こつこつ仕事をするタイプ。緩やかな語り口が印象的で、オフ時間のカラオケは決まらずにうまくないけど一生懸命歌うし、ユニークで楽しい後輩でした。

(平野公三)

町青協のイベントで、節分の鬼役の加藤さんを偶然見掛けました。鬼役の演技が真に迫っていたので、子どもたちが本気で怖がって逃げていたのが印象的でした。

(田中彰恵)

職場では物静かでしたが、演劇で生き生きとした姿がやはり印象的です。何事も一生懸命取り組んだ方だったのだと思います。

(八幡まゆみ)

里館ひろ子さんのこと

リーダーシップがあって、いつもみんなを引っ張ってくれました。「ひろ子会」という集まりがあって、ひろ子さんを囲んで飲み会をしたり、温泉とかスキーにも行ったりしました。カラオケでは、ハスキーな声で久保田早紀さんの「異邦人」や門脇有希さんの「ノラ」をよく歌っていました。

(平野正晃)

豪放磊落^{らいらく}な性格で、〴〵浜のかあさま〴〵を地で行く方。

福祉課に配属された時には直属の係長だったので、私にとっては上司というよりも、役場のおふろ〴〵的存在でした。飲み会にもよく誘っていただき、大変かわいがってもらいました。「ひろ子会」、楽しいお酒の会でしたね。ひろ子さんの「異邦人」「ノラ」、ひろ子さんと同級で仲良しだった岩手東海新聞記者の故佐々木正樹さんの「亜麻色の髪の乙女」、もう一度聴きたいです。

(森田英之)

よく飲み連れて行ってくれました、仕事のことだけでなく、いろんな話をして、くよくよしない生き方を教えてもらいました。出張に行くとき必ず、その土地のおいしいお菓子を土産に買ってきてくれて、「休みなながら」とみんなに声を掛けてくれました。休日出勤した時にお孫さんを連れてきたことがあり、一緒にお絵描きをしたのを覚えています。さばさばしてかっこよく、姉御肌でしたが、優しいおばあちゃん的一面もありました。

(田中彰恵)

関郁夫さんのこと

昭和50(1975)年ごろ、広報誌の担当をしていて、イラストを描くのも得意でした。役場の野球部にも所属していました。釜石南高校(現釜石高校)の1年先輩で、当時、国鉄山田線終着の釜石駅で下車しバスを乗り継いで通学が難儀だったため、列車を釜石線松倉駅まで乗り入れてほしいという署名運動があり、お互いがんばった思い出があります。

(越田由美子)

公私にわたってお世話になりました。役場の野球部ではマネジャーを務められ、試合や飲み会の手配などあらゆることに気を配ってくださいました。私と違ってお酒は静かに飲むタイプでした。

(平野公三)

福祉課の係長時代は足しげく保育所に来て、いろいろ要望を聞いてくださいました。震災の2カ月前に福祉課長になられた時も「何年かブランクがあるから、

分からないことを教えてくれよな」ってみんなに語り掛けていました。柔和な方で怒った顔を一度も見たとがありません。

(中野久実子)

いつも落ち着いた話し方をされる方でした。懇親会でご一緒した時、ウイスキーしか飲まないということなぜかと尋ねたら、胃にウイスキーの膜が張ってあるのでほかのお酒では拒否反応を起こすと、いつもの落ち着いたトーンでおっしゃっていた思い出があります。冗談だったのだと思いますが、当時は私もまだ若かったので少しそのことを信じていました。

(八幡まゆみ)

倉堀健さんのこと

部下としてすごく頼りがいがありました。難しくても、私がどうやるか迷っている仕事も進んで引き受けてくれました。

(越田由美子)

倉堀とは同期です。この辺で「ポカン野球」っていうんですけど、ビニールのボールとプラスチックのバットでプレーできれば大丈夫だからと、一緒に役場の野球部に入りました。彼は運動神経がよくて、バスケもサッカーもできました。同期は男女7人いて、一緒にお酒を飲んだり、カラオケに行ったりというのはしょっちゅうでした。

(平野正晃)

福祉課で私の隣の席でした。賢かったですね。仕事の飲み込みが早く、遠回りせずに、どうすれば一番要領よくできるかを考えてから行動に移すタイプでした。

(小國晃也)

仕事で行き詰った時、倉堀の一言で、気持ちごとにも楽になったことがあります。今でもガチガチになりそうな時は、その一言を思い出します。

(田中彰恵)

フットワークがよく、頼りになる方でした。職場で車いすの方が勤務されていた時、何かあれば誰よりも先に介助していたことがとても印象に残っています。心優しい方だったのだと思います。

(八幡まゆみ)

阿部久美子さんのこと

保健師として、地域のこと、住民のことを第一に考え、いつも最善を尽くしていました。地域包括支援センター班長として、福祉課長や各班長とよく話し合いながら仕事を進めていました。

(越田由美子)

包容力があり、班員の信頼も厚く、誰からも好かれる方でした。信頼していただき、課題となっていた業務を任せていただくなど、地域包括支援センターでの経験は、私の大きな財産となっております。

(佐藤明)

女性として、保健師として素晴らしい方でした。明るくて、どんな人にも分け隔てなく声を掛けていました。

(中野久実子)

直属の上司で、同じ保健師としていろいろ教えを受けました。入庁したばかりの私の意見もくんで、仕事を任せてくださいました。頭ごなしに駄目と言われたことがなく、部下を信頼して指導していただいたと思っています。

(阿部静子)

私の結婚式の幹事を引き受けてくれました。気配りの人で、「クミちゃん」と呼んで気を許せる仲でした。

(平野公三)

地域包括支援センターで一緒にお仕事させていただきました。いつもにこにここと穏やかでしたが、仕事に対しては熱意を持って取り組まれていました。荒立てることなく物事を解決してくれる、理想の上

司でした。

(八幡まゆみ)

小笠原裕香さんのこと

裕香ちゃんは窓口の対応が丁寧で優しいので、毎日のように会いに来るおじいさんもいました。役場で採用された社会福祉士は彼女が初めて。故澤館純一さんが福祉課長の時に、お客さんを各課でたらい回しにしないでワンストップで対応できるようにという意向からでした。裕香ちゃんは窓口でいろんな所につないでくれて、本当に頼りになりました。

(黒澤直美)

ある時、高齢のご夫婦から「病院に行きたいけど財布と保険証が出てこない」という電話があり、そばでやり取りを聞いていた裕香ちゃんが自分の担当のご家庭ということ、一緒に家まで行って探してくれました。いつも心から寄り添って相手の話を聴いていたのが印象的で、町の弱い立場の方々のことを裕香ちゃん

が一番よく知っていたと思います。本当にいい子で、いい子で。

(中野久実子)

平成22(2010)年の「ふるさとCM大賞」(岩手朝日テレビ)の収録で、町のキャラクターおおちゃんに扮してくれたのが印象深いです。総務課で準備のため着ぐるみに入るのを見て、「恥ずかしくないか」って聞いたら、「私、好きなんです」って言って、手足を動かして見せてくれました。あの時の笑顔が忘れられない。

(平野公三)

同期で入庁して、地域包括支援センターで4年間、苦楽を共にしました。年下なんですけど、仕事ではとても頼りになり、責任感も強かったです。成年後見制度の新しい条例を作る時には、社会福祉士として本当に努力、奮闘していました。

(阿部静子)

岩間成子さんのこと

明るくてはきはきとした方でした。息子さんが野球でがんばっているという話を聞いたことがあります。故小笠原裕香さんと仲がよくて、私も交えて3人でよく冗談を言い合っていました。

(佐藤明)

震災の前年度に町内の介護施設から役場に来られました。その施設では訪問看護に尽力されたと聞いていて、看護師としてすごく仕事のできる方でした。おごったところが少しもなく、一から教えてくださいますという姿勢でとても謙虚でした。

(阿部静子)

私どもの施設が訪問看護部門を立ち上げた当初から看護師として約10年間、活躍してくれました。当時、3人一組で車に乗り込み、大槌町のほか釜石市や山田町の高齢者宅を一軒一軒回り、生活の介助やリハビリのお手伝いなどをしていました。何か問題があれば、

副施設長だった私に「元さん、お話があります！」と言って、物おじせず解決に動きました。職場では明るいムードメーカーで、飲み会のカラオケでZARDの「負けないで」を歌っていたのを思い出します。

(山崎元)

息子さん2人が少年野球の安渡タイガースのメンバーで、私がコーチでした。試合の時は縦じまの衣装で一生懸命に応援し、大変な熱の入れようでした。

(小國晃也)

菊池則子さんのこと

さばさばとしていて、自身のつらい経験も明るく話せる人でした。

(中野久実子)

以前は歯科衛生士をしていて、幼かった私の息子が歯科医院で治療中に則子さんの指を誤ってかんでしまったことがありました。役場で顔を合わせた時に謝

ると、「いいんですよ。気にしないでください」ってここにこしていましたっけ。

(平野公三)

猫や犬が好きで、家で飼っていたそうです。猫にかまれたとか、爪を引っかけられて服がほつれたとかいう話をよくしていました。仕事では何事も自分から積極的に関わろうという姿勢でした。

(小國晃也)

休日には海水浴場でライフセーバーをやっていて、アクティブな方でした。保護犬の情報をネットなどで見ると居ても立ってもいられず、何度もアクセスして「もらい手が見つかった」と言って喜びながらも残念そうな表情をしていました。則子さんが携わった福祉課の業務では、もう少しで「子育てガイド」のパンフレットが出来上がるところでした。データが津波で流されなければ完成させて町民に配りたかったです。

(黒澤直美)

佐々木良一さんのこと

故澤舘純一さん、故木村圭治さんと同学年。良一さんは建設課、澤舘さんと木村さんは農林課で隣同士の課でもあったことから、何かと話をする機会があったようです。冗談好きな反面、仕事を一生懸命にする人でした。

(越田由美子)

仕事に対する考え方を教えていただきました。「仕事を俯瞰してみろ」と言われ続けましたが、未だできていないことを心苦しく思います。特産品の話をしていた時、シウリ貝（ムール貝）の話題となり、子どもの頃に船の上でシウリ貝を七輪であぶり、半生で食べたという話をされていて「あれ、すげえおいしいんだよ」ととても懐かしそうにされていたことが思い出されます。

(八幡まゆみ)

人の倍以上仕事をこなしていた方だったと思います

す。私が息子さんの年齢と近いということ、子どもと仕事をしているようだと言談を言って笑っていたことが思い出されます。「簡単に（合理的に最短で）仕事をしなさい」との言葉を頂いたのが印象的で、すごく共感したことを覚えています。

（佐藤明）

六串俊範さんのこと

私と誕生日と干支が一緒でした。ちょうど一回り上で。役場の野球部の監督をされていて、かわいがってもらいました。

（白澤洋喜）

釜石南高校（現釜石高校）の野球部ではスラッガー（強打者）で鳴らし、野球を愛好する者同士という親しみがありました。後になって私の審判仲間が話題にしているのを聞いて、「本当にすごい男だったんだなあ」と思いました。一度、何かの折に「公三さんらしくない」と親しみを込めて注意され、反省した時のこ

とが強く印象に残っています。

（平野公三）

釜石南高校の先輩。野球部のキャプテンで左打者でした。お酒が好きで、声も大きい。話しやすい雰囲気なので、みんなから慕われました。

（小國晃也）

仕事でも駄じゃれを言っては周りを楽しませてくたさいました。娘さんたちのために「嵐」のライブチケットを買いたいといろいろと調べていて、やさしいお父さんだなと思っていました。同期入庁でした。

（八幡まゆみ）

一回り以上年齢差がありましたが、友達感覚でお話させていただき、一緒に仕事をするときもよく笑っていた印象があります。プライベートで遊ぶことも多く、一緒にいて楽しい方でした。

（佐藤明）

佐野雅樹さんのこと

リーマンショックの後の緊急雇用で産業振興課に来てもらいました。測量ができたので、おかげで未完成だった農道台帳の整理が進みました。真面目な人でした。

(臼澤洋喜)

おとなしく控えめなタイプ。穏やかで人当たりがよく、みんなから好かれました。飲み会にもよく顔を出し、帰りに先輩を送ってあげることもありました。課外活動と一緒にフットサルをやりました。

(小笠原佑樹)

懇親会などでお酒を飲むと、真っ赤になってにこにこしていたことが印象深いです。役場の正職員になりたいと試験勉強をがんばっていたことが思い出されます。

(八幡まゆみ)

兼澤圭作さんのこと

新山牧場で一緒に仕事をして、30年にもなる付き合いでした。牧場で使うトラクターや、それに付ける草刈りの作業機など何でも自分で修理し、ちよつとした部品も手作りしていました。いつも段取りを考えながら仕事に励み、頼りになる先輩でした。お酒が好きで、飲むといつもにこにこしていたのを思い出します。

(佐々木和之)

奥様と仕事で一緒にしていたことがあり、ご夫婦のなれ初めを伺ったことがあったのでそのお話をしたら、少し照れてうれしそうな顔をされていたことが印象に残っています。専門のお仕事をされていましたので、職場での信頼も厚かったです。

(八幡まゆみ)

小川千里さんのこと

大槌中学校が荒れて大変だった時期にPTAの役員

で、学校の立て直しに尽力しました。夜遅くまで対策会議をして、学校の中で抑え込むじゃなく、地域を挙げて子どもたちを育てていこうという機運を盛り立ててくれました。

(伊藤正治)

娘さんの名前が私と一字違いだからと言って、休日出勤をしているとよくあめ玉をくれました。気さくな方でした。

(黒澤直美)

家が近所です。津波の後、城山の災害対策本部で私に対応中の留守に、千里さんのお父さんが何度も息子の安否を気にして訪ねてきたと妻から聞き、胸が痛みました。生前の千里さんには、人付き合いの仕方などについて貴重なアドバイスをしていただきました。人間関係を大切にする方でした。

(平野公三)

お仕事で一緒にすることはなかったのですが、娘さ

んが書道展で入賞された際、「娘さん、すごいですね」と声を掛けたら、とてもうれしそうな顔をされていたことが印象に残っています。

(八幡まゆみ)

三浦英人さんのこと

安渡の地元で保育所からずっと一緒の1歳年上の幼なじみで、小さい頃の写真もあります。役場のラグビー部に所属し、私も英人さんに誘われて試合に出たことがあります。英人さんから「ラグビーは紳士のスポーツだ」と言われたことが心に残っています。

(平野公三)

怒られるかもしれませんが、「くまのプーさん」に似ていると思っていました(笑)。少し怖いイメージがあったのですが、話をすると優しい方でした。仕事熱心だった印象があります。

(佐藤明)

同じ安渡出身でしたので、私にとっては「神楽の英人さん」という印象が強く、小学校の頃から安渡大神楽で踊りの基礎を教えてもらいました。お祭りの時は、いつも行列の先頭で子どもたちを見守る姿が印象的でした。スポーツ少年団でも大変お世話になりました。

(小國晃也)

前川美知さんのこと

美知は釜石南高校（現釜石高校）で同学年。20年以上前、県内では水沢高校にしかなかった女子サッカー部を釜石南高校に創設した中心メンバーでした。教育学部の出身で、役場に就職する前は大槌北小学校（現大槌学園）で講師をしていました。役場では最初に町民課に配属され、教職と打って変わって、町民と接する最前線で戸惑いもあったと思いますが、持ち前の明るさでがんばってくれました。役場の野球部のマネージャーも務め、熱心に活動していました。

(小國晃也)

女子職員の会の時、自分で衣装まで準備し、歌って踊ってみんなを楽しませてくれたのを思い出します。でも、一番楽しそうなのはみっち（前川さん）本人でした。結婚報告の時の「お先しまーすっ」のあの意地悪な笑顔が忘れられません（笑い）。本当に、本当にかわいい、かわいい後輩です。私が退職してからも時々、近況報告のメールをくれて、子どもに作ったお弁当の写メを自慢げに送ってきたこともありました。愛情が詰まったかわいなお弁当でした。

(田中彰恵)

先輩職員にも臆せず意見し、良い仕事をしようとしていた姿勢が印象的でした。システム導入の時も、定住促進住宅設置の時も、新しい仕事に一生懸命に取り組んでいました。

(八幡まゆみ)

中村仁人さんのこと

同期で親しくしていました。社交的ではあるんですが、自称「明るいオタク」。インドア派でゲーム好きでした。よく金曜日の夜に仲間の家に集まって、朝まで「モンスターハンター」などのゲームに興じていました。津波があった日も会うことになっていました。多少マイペースなところがあり、遊びの約束の時間になっても現れず、家で熟睡していたなんていうこともありました。

(菊池信也)

私と同期で、自分の関心のある世界にどっぷりはまり込むところがありました。アニメやゲームなど共通の趣味があったので、よく一緒に遊びました。少女系のアニメが好きでしたね。

(三浦義章)

彼のお父さんは消防士で、一緒に朝野球をやる先輩でした。中村さんの息子が役場に入って来たなと思

い、「お父さんのことはよく知ってるよ」と声を掛けましたことがあります。

(平野公三)

岩間久さんのこと

同級生でした。久っという名前なのに、不思議とみんなから「大ちゃん」と呼ばれて。なぜかというところ、役場に入ったばかりの頃に、何かの席でアニメ「いなかつペ大将」の主題歌「大ちゃん数え唄」を披露したことあったんですね。それから、先輩も後輩もみんな「大ちゃん」って。

(越田由美子)

役場の野球部で一緒でした。私と同じくレギュラーではなかったけれど、ムードメーカーでした。岩間さんが結婚するまで、岩間さんの自宅でマージャンをするのが、若い頃の土曜の午後の楽しみでした。

(平野公三)

三浦徳幸さんのこと

私が平成13(2001)年に入庁した時、水道事業所で初めての先輩。10歳年上で、仕事のノウハウや社会人としてのふるまいを教わりました。よく一緒にお酒を飲み、公私にわたって弟のようにかわいがってもらい、毎月お金を積み立てては年に一度、旅行に行っていました。お酒は焼酎、たばこはロングピースを好んでいました。吉里吉里きりきりにヒラガニを釣りに行き、大きいのがかかると自分の名前を付けて「これはノリガニだ」、小さいのだと私を指して「エイシガニだ」とおどけていました。よく娘さんや息子さんのことを気に掛けていたので、元気で暮らしていることを伝えてあげたいです。

(藤原英志)

漁協さんの物販があるとき、よく取りまとめの窓口になられていたので、最初は水産関係の職員の方だと思っていました。後に技師さんだと知って少し驚いた記憶があります。私がいた産業振興課へ顔を出すとき

は、当時職員の古舘一義さんとの掛け合いが面白くて、いつも笑っていたことが思い出されます。

(八幡まゆみ)

川端大佑さんのこと

朴訥とした方でしたが、弊社が管理する大槌浄化センターでは細かなことも含めていろんな話をしました。業務改善の要望にもよく応えてくれました。

(佐々木真也)

役場サッカー部で大活躍しており、試合中どんなに距離があっても、予測通り足元にパスをくれたので、そのテクニックに衝撃を受けました。プライベートで7月7日に盛岡で一緒に遊んだのは忘れられません。

(佐藤明)

家が安渡で近所同士。双子でサッカー選手だったので有名でした。物静かでいつも冷静。役場に出勤する時によく一緒になり、駐車場から歩きながらとりとめ

のない話をしたものです。

(小國晃也)

小学生の頃、サッカーチームのコーチをしていただきました。普段は優しく、時には厳しく指導してもらったことを覚えています。新チームだったので、1年ほどこしか一緒にできませんでしたが、楽しくサッカーできたあの時間はとても印象に残っています。いつかプレーヤーとして、一緒にフィールドに立ってみたいかったです。

(古川海暉^{ひかる})

佐藤拓也さんのこと

吉里吉里の小中、釜石南高(現釜石高)とずっと一緒でした。高卒後は2人とも千葉や東京に出て、もう1人の吉里吉里出身の友達と3人でよく遊びました。地元に戻ってから同じメンバーで毎週のように会って、家の2階でお酒を飲みながらゲームをしていました。目立つタイプではないけど、明るい性格でした。

ささいなことでもけんかもしましたが、次に会う時にはけろりとしていました。気を遣わない、そばにいたり前、いつも自然に集まる仲間でした。

(倉本和博)

農林課で一緒でした。真面目だけどノリがよく、地味に面白い人。同世代なのでギャグが通じました。役場のサッカー部では故川端大佑さんと共にディフェンスを務め、川端さんがセンターバック、佐藤さんがサイドバックという布陣でした。

(小笠原佑樹)

小國奈穂子さんのこと

ナオちゃん(小國さん)は同級生で家も安渡の近所。家族ぐるみの付き合いで、桜の季節にはよくみんなで花見をしたものです。保育所から安渡小、大槌中まで一緒、大人になってからも2人でよく遊びました。人見知りするタイプといえそうですが、仲良くなればとても気さくな人でした。カナダへの留学経験

があつて、洋楽を聴くのが好きでした。

あてどなく一緒にドライブすることが多く、震災前年の秋ごろはひたすら国道45号を下って宮城県石巻市まで行きました。ナオちゃんは14歳離れた弟のためにドーナツをお土産に買い、道の駅で温泉に浸かって帰ってきたことを覚えています。短大の卒業旅行先の沖繩が気に入ったらしく、お金を貯めていつか一緒に行こうねと話していた矢先の津波でした。亡きがらは翌月、私が帰省していた時に見つかり、火葬に立ち会うこともできました。もう一度会って、いろんなお話がしたいです。

(前川里美)

普段は物静かな方でしたが、給湯室では、故押野千恵さんと楽しそうにおしゃべりしながら茶わんを洗ってくれていました。2人がいる給湯室はなんだか華やいでいて、ほほえましく思っていました。

(八幡まゆみ)

押野千恵さんのこと

オッシー(押野さん)とは中学校からの友人で、高校でも毎日みんなと一緒に弁当を食べるなど、楽しい青春時代を過ごしました。オッシーは修学旅行で出会ったバスガイドさんに憧れて進路を決め、京都で就職したので、高校卒業後、友人たちはみんなそれぞれ土地で数年過ごしましたが、年に数回は必ず集まって楽しい時間を過ごしました。オッシーはバスガイドとしてがんばっていて、帰って来ると「大阪うまいもの歌」を歌ってガイドの仕事の楽しさも教えてくれました。それが面白くて私たちは何度もリクエストして歌ってもらいました。

京都から大槌に戻ってからは職場の町役場と私の実家が近かったので、よく仕事帰りに会って話をしました。優しいふんわりとした人柄の反面、目標に向かって努力する姿を誰かに見せるわけではなく、人知れずこつこつとがんばっていました。そういう面もとても尊敬しています。10年も経ったけど、3月11日が近づくと一瞬である時に戻る感覚があつて、私たちは

オツシーとの楽しい日々を鮮明に思い出し、決して忘れることはありません。

(小國智美)

いつも大型コピー機で図面を作成していたことが印象に残っています。イベントの時などに、コピー機の使い方を嫌な顔をせず教えてくださいました。いつもにこやかにお仕事されていたことが印象深いです。

(八幡まゆみ)

前川正志さんのこと

私が平成4(1992)年に入庁して中央公民館に配属された時、先輩として事務のイロハをやさしく教えてくれました。昼休みはよく一緒に将棋を指し、強かったのを覚えています。

(祝田茂)

寡黙で実直。仕事は正確で、時間がかかっても理解するまでとことんやりました。議会のことも詳しくかつ

たです。理不尽なことがあると「これはおかしい」と率直に口にする一面もありました。

(赤崎仁一)

ロックが好きで、ドラムをたたいていました。カラオケでレッドツェッペリンを歌うこともあったけど、千昌夫さんの「味噌汁の詩」が一番上手だった。酔って顔を真っ赤にしながら歌っていたのを懐かしく思い出します。

(平野公三)

真面目で物静かな方でしたが、話し始めると終始にこにこしていました。

(澤館悦子)

町民福祉課と議会事務局で一緒に働かせていただきました。議員さんの視察研修先の調整や会議録作成などを黙々とこなしていた姿が思い出されます。ギターが好きで、ギターの曲の話をしてくれたことが印象に残っています。

(八幡まゆみ)

大槌町役場職員

大槌町東日本大震災津波犠牲職員状況調査報告書

令和3年（2021年）7月発行

編集・発行 岩手県大槌町

〒028-1192
岩手県上閉伊郡大槌町上町1番3号

印刷・製本 三協印刷

〒028-1102
岩手県上閉伊郡大槌町赤浜1丁目3番23号

本書の著作権は大槌町に帰属します。